

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第4集

# 祝田遺跡 I

昭和57・58年度都田川河川改修工事(柳江地区)

埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

財團法人 駿府博物館

静岡埋蔵文化財調査研究所

静岡埋蔵文化財調査研究所調査報告 第4集

# 祝田遺跡 I

昭和57・58年度都田川河川改修工事(細江地区)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

1984

財団法人 稲府博物館付属  
静岡埋蔵文化財調査研究所

## 序

昭和57年4月、県内における埋蔵文化財の調査研究を目的として設立された本研究所の初年度事業の一環としたものが都田川河川改修工事に伴う祝田遺跡の調査であった。

祝田遺跡は手焙形土器や布目瓦の出土地として古くから知られ、都田川下流域のなかで主要な位置を占めている遺跡である。また都田川の自然堤防上に立地する遺跡群の様相は過去の調査例が少く、資料も断片的なものでその実態は明確にされていない。現在遺跡群に対する調査は緒についた段階であり、今回の調査も多くの注目をあつめた。

二ヶ年にわたる調査において方形周溝墓、土坑等が発見され、なかでも上器棺は、都田川下流域においては初例であり、他遺跡の表探資料から低湿地への進出は弥生中期といわれているなかで、中期後半という明確な時期を示す好資料となった点は特筆すべきである。また多量の布目瓦の出土は、遺構の性格を示す積極的な根拠は見い出せなかったが、寺院跡に該当するという感を深くした。このように多くの成果を得て現地調査を終了したが、次年度の報告においては、これらの問題が引き継がれ展開されてゆくであろう。

本調査と本報告書の刊行には多くの人々の援助と協力があった。なによりも深い理解をもって事業にあたられた静岡県浜松土木事務所に敬意を表するものであり、あわせて献身的な努力をおしまなかった細江町教育委員会および指導助言をあたえられた静岡県教育委員会に深い謝意を呈するものである。また、調査報告書の執筆に関係した当所員の辛労に対して感謝したい。

昭和59年3月

財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤 忠

## 例 言

1. 本書は昭和57・58年度都出川河川改修工事（細江地区）埋蔵文化財発掘調査に伴う祝田遺跡調査報告書Ⅰである。
2. 調査は静岡県浜松土木事務所から委託を受けて、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、調査調整機関・細江町教育委員会・調査実施機関・財團法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所で実施した。
3. 昭和57年度発掘調査は昭和57年12月より昭和58年3月に行い昭和58年度は昭和58年12月より昭和59年3月の間で実施し整理作業も並行して行った。
4. 調査は静岡埋蔵文化財調査研究所（主任調査研究員）佐野五十三、細江町教育委員会・栗原雅也を担当者として実施した。また、静岡埋蔵文化財調査研究所（調査研究員）足立順司が援助した。
5. 本書の執筆は佐野五十三があたり、編集刊行については静岡埋蔵文化財調査研究所が行った。
6. 昭和57・58年度調査の出土遺物は昭和59年度に祝田遺跡調査報告書Ⅱに含めて刊行する予定である。

遺構遺物の标记

遺 構 (S)	遺 物 (R)
A 1 構	W 木製品
B 壁穴住居跡	P 土製品
C 祭祀遺構	S 石製品
D 洞	M 金属器
E 片 戸	B 玉類
F 土坑・土壤	
G 小銀冶遺構	E その他
H 墓立柱建物	
P 小穴 (Pit)	上記番号のみで符号なし
X その他	

# 目 次

## 序

### 例言

第Ⅰ章はじめに .....	1
第1節 調査に至る経過 .....	1
第2節 調査の方法 .....	1
第3節 調査の経過 .....	1
第Ⅱ章位置と環境 .....	4
第1節 地理的環境 .....	4
第2節 歴史的環境 .....	5
第3節 発掘区の土層 .....	10
第Ⅲ章遺構 .....	13
第1節 新石器時代～古墳時代初頭の遺構 .....	13
(1) 溝 .....	13
(2) 方形周溝墓 .....	17
(3) 土坑 .....	17
(4) 埋設土器 .....	25
第2節 古代末～中世の遺構 .....	27
(1) 溝 .....	27
(2) 土坑 .....	34
(3) 堀立柱建物跡 .....	34
(4) 井戸 .....	40
第3節 中世末～近世の遺構 .....	44
(1) 溝 .....	44
(2) 土坑 .....	45
(3) 桶埋設遺構 .....	46
第Ⅳ章まとめ .....	47

## 挿図目次

第 1 図	遺跡位置図	6
第 2 図	遺跡周辺地形図	9
第 3 図	グリット配図	10
第 4 図	発掘区（南限）土層図	11
第 5 図	遺構全体図	15
	1. 中世遺構全体図	15
	2. 弥生時代遺構全体図	15
第 6 図	弥生時代溝尖測図 1	18
第 7 図	弥生時代溝実測図 2	
	第 1 号・第 2 号方形周溝墓尖測図	19
第 8 図	第 3 号方形周溝墓尖測図	20
第 9 図	弥生時代上坑実測図 1	21
第 10 図	弥生時代上坑尖測図 2	22
第 11 図	弥生時代上坑実測図 3	23
第 12 図	埋設土器実測図	27
第 13 図	中世溝実測図 1	28
第 14 図	中世溝尖測図 2	29
第 15 図	中世溝実測図 3	30
第 16 図	中世溝実測図 4	35
第 17 図	中世溝尖測図 5	36
第 18 図	中世溝実測図 6	37
第 19 図	中世上坑実測図	38
第 20 図	櫛立柱建物跡実測図	39
第 21 図	S E 0 1 実測図	40
第 22 図	S E 0 2 実測図	41
第 23 図	S E 0 3 実測図	42
第 24 図	S E 1 0 1 実測図	43
第 25 図	S X 1 0 3 • S X 1 0 9 実測図	44
第 26 図	S D 1 1 2 • S D 1 1 3 実測図	45

## 図 版 目 次

- 図版 1 稲田遺跡遠景（航空写真）  
図版 2 1. 稲田遺跡遠景（東より）  
2. 調査前近景（西より）  
図版 3 1. 57年度調査区全景（航空写真）  
2. 58年度調査区全景（航空写真）  
図版 4 昭和58年度調査区中世面全景（西より）  
図版 5 1. 昭和57年度調査区中世面全景（東より）  
2. 昭和57年度調査区弥生面全景（西より）  
3. 昭和58年度調査区弥生面全景（東より）  
図版 6 1. SD 16（北より）  
2. SD 123  
3. SD 01 全景  
図版 7 1. SD 01 遺物、礫出土状況  
2. SD 02（北より）  
3. SD 03（南より）  
図版 8 1. SD 05（東より）57年度調査  
2. SD 07（東より）  
3. SD 09（西より）  
4. SD 12（西より）  
図版 9 1. SD 103・104（南より）  
2. SD 103 石組み  
3. SD 101（東より）  
図版 10 1. SD 112（北より）  
2. SD 105・106・109（南より）  
3. SD 112・113 完掘（北より）  
図版 11 1. 第1号方形周溝墓（南より）  
2. 第2号方形周溝墓（南より）  
3. 第3号方形周溝墓（東より）  
図版 12 1. SH 01（東より）  
2. SH 02（南より）  
3. SH 03（北より）  
図版 13 1. ピット内柱根出土状態  
2. ピット内壁板出土状態  
3. SX 09 川土状態  
図版 14 1. SX 112 土器出土状態  
2. SX 121 土器出土状態

- 図版 15 1. SX 122 土器出土状態（1）  
2. SX 122 土器出土状態（2）
- 図版 16 1. SX 128 土器出土状態  
2. SX 06 南より
- 図版 17 1. SX 103  
2. SX 109
- 図版 18 1. C 8区上器集中箇所  
2. B 11区土器集中箇所
- 図版 19 1. SE 01  
2. SE 02
- 図版 20 SE 03
- 図版 21 1. SE 03 底の遺物出土状況  
2. SE 03 検出の状況
- 図版 22 1. SE 101 底の状況  
2. SE 101 西壁
- 図版 23 1. 埋設土器No 1 出土状態  
2. 埋設土器No 2 出土状態
- 図版 24 1. 埋設土器No 3 出土状態（1）  
2. 埋設土器No 3 出土状態（2）  
3. 埋設土器No 3 出土状態（3）
- 図版 25 1. 埋設土器No 4 出土状態  
2. 埋設土器No 5 出土状態  
3. 埋設土器No 6 出土状態

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経過

昭和49年7月、台風8号による豪雨は、静岡県下各地に洪水による甚大な被害をもたらした。細江町においても、都川の新祝田橋上流左岸堤防の欠壊により下流域一帯が大洪水にみまわれた。これを契機として静岡県上木部では河川改修、護岸補強等を内容とする防災工事計画を策定し、昭和51年度よりその一部を着工している。

ところで都出川下流域の沖積平野では、従来より遺跡の存在が知られ、弥生時代以降の遺物が確認されていた。昭和45～47年度、静岡県教育委員会が行った県内埋蔵文化財包蔵地分布調査によると、細江町内において7ヶ所（祝田、田代寺、茂塚、森、岡地船渡、川久保、市場遺跡）の遺跡の存在が確認された。

昭和54年、これらの遺跡付近において河川改修工事が着工されるに先立ち県教育委員会は浜松市教育委員会、細江町教育委員会の協力を得て遺跡の所在を再確認するとともに、県土木部と工事に伴う遺跡の取り扱いについて協議に入った。その結果、工事用地として買収完了地域の範囲確認調査を昭和56年度に実施して今後の工事計画を協議決定することとなった。

昭和56年1月～3月までの3ヶ月間、範囲確認の予備調査が、祝田、茂塚、森、川久保の4地区で実施された。これは、「都出川流域の遺跡」として刊行された。この調査に続いて、同年12月1日より昭和57年3月まで、川久保遺跡を中心とした調査が細江町教育委員会を主体者として実施された。この調査において、祝田遺跡では、トレンチによる最上層の遺構面の確認が行われ、多数のピット群が検出された。この調査については細江町教育委員会により『川久保遺跡ほか、発掘調査概報』としてまとめられている。

昭和56年度以降の調査は、昭和57年4月、財團法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所の発足に伴い、これに調査実務を行わせ、細江町教育委員会を調査調整機関として実施することとなり、昭和57年度には遺跡の西半分約800mを調査することとなり、昭和57年12月より準備を行い、翌58年1月より現地調査に入った。

## 第2節 調査の方法

調査は一辺10mのグリッドを組み東西軸、B、C区の境が発掘対象区の中央部となるように設定した。各グリッドの呼称は西より算用数字で表記し、北からアルファベットを用いA・B・Cとした。なお南北軸はN-23°Wである。ベンチマークは祝田橋右岸(10.521m)より移動したものでBM 5.572mを用いた。

実測図は20分の1縮尺を原則とし、井戸、土坑状遺構、遺物を伴う溝等の詳細図については10分の1縮尺とした。なお平面実測は通り方による方法を原則として行った。

写真は中型カメラ1台(6×7版、1眼レフ)小型カメラ2台(35mm、1眼レフ)を使用し、遺構は中・小型カメラで撮影したが、小型カメラのうち1台はスライド用に他は、メモ用としても使用した。

## 第3節 調査の経過

過去2度にわたる調査の経過は次のとおりである。

#### 昭和57年度

昭和57年12月中旬より現地調査の準備に入る。1月初旬にプレハブ設営、資材搬入、重機による表土除去を行い、本格的な調査に移行する。

昭和58年1月10日～14日 重機による表土除去後の整備、排水溝、グリット設定、IV層上面より本格的な人力による調査を行う。

1月17日～21日 IV層掘下げ、発掘区全域から中世を主体とした多量の遺物が出土したが、遺構は検出されなかった。V層に移行すると上面より遺構が発見される。発掘区西半部においてピット、溝、土坑を確認する。

1月24日～28日 西半部の遺構調査に入る。東半部の遺構検出を行い掘立柱建物跡3棟、井戸2基を発見、四半部から全体平面圖作成作業を開始する。

1月31日～2月4日 東半部の実測開始し井戸の調査に入る。個々の遺構写真を撮影し、全体写真準備を行う。

2月7日 中世面の全体写真撮影を行いV層下部への掘下げに移行する。中世のピットが新たに発見され補足の実測を行う。

2月14日～18日 東半部V層下部の掘下げを行い、ピット、溝の補足実測を行う。

2月21日～26日 V層下部の掘下げを続行する。弥生土器の出土が西半部のB・C-4～6区では極端に減少し、東半のB・C-7・8区で僅かに出土する。土器のなかには古式土師器の出土もみられた。中世溝SDIIが新たに検出され調査に入る。中世面の実測の補足作業を完了する。

2月28日～3月5日 全体をV層下部まで掘下げた結果、溝状遺構、土坑が発見され調査に入る。

3月7日～12日 遺構を掘上げ、写真撮影及び実測の作業に移行した。弥生面の全体写真撮影。

3月14日～19日 排水溝壁を拡張し、土層の再確認を行う。この際、C-7区南壁において、新たに井戸が発見され調査を行う。排水溝の土層実測を行い、14日より土器水洗を開始する。

3月22日～25日 井戸の調査を終了し、土器水洗は全体の約分を完了させ25日で終了した。現場での資器材、遺物の搬出を完了し、3月25日で現地での調査を終了した。

#### 昭和58年度

昭和58年12月より現場発掘調査に向けて準備にとりかかる。プレハブ設営、発掘区設定、重機による表土除去等の準備に入る。発掘用資材搬入を行い、12月の準備作業を完了させる。

1月9日～12日 1月9日より調査を開始する。発掘区内にグリット基準杭打ち作業を行い、発掘区内外を南北A・B・C、東西を9～13区（一辺10m）のグリットに設定、V層上面の遺構検出作業に入る。発掘区壁清掃、上層実測、周囲に排水溝を設定する

1月17日～20日 中世面の遺構検出を完了し遺構掘上げ写真、実測作業を併行する。（B・C-9～11区）

1月23日～27日 SD103・104のプラン検出、掘上げ、中世の大型溝であることを確認。東半部B・C-12区の実測作業。併行して、写真撮影を行う。中世面全体写真撮影を完了する。

1月30日～2月3日 排水溝の深掘りを行い弥生時代～古墳時代初頭面の土層の状況を検討する。B・C-9区から中世面下の掘り下げを開始する。

2月6日～10日 西半のB・C-9～11区弥生時代～古墳時代初頭面の中程まで掘り下げ、溝、土坑、ピットを検出する。中世のピット群、補足実測を継続する。東半部、中世面の実測、個々の遺構の写真撮影を完了する。

2月13日～17日 東半部を弥生時代～古墳時代初頭面の中位まで掘り下げ、遺構検出、実測、写真撮影。B・C-11区に弥生時代の壇場及び弥生後期～古墳時代初頭の土器が数ヶ所で集中して出土した。

中世の井戸 S E 101 を検出し調査に入る。

2月20日～24日 西半部弥生時代～古墳時代面の実測、遺構の写真撮影を行う。B・C-10・11区で方形周溝墓3基検出、その周辺に焼土、炭化物を多量に伴う弥生後期～古墳時代初頭期の土坑状遺構を検出し個々の調査に移行する。22日には、三者による現地協議を行った。

2月27日～3月2日 弥生面の上塙状遺構溝、方形周溝墓の掘り上げ、上層尖削を行う。

3月5日～10日 各遺構の掘り上げを完了し、実測、写真撮影作業を中心に現場を展開させる。3月9日、航空写真撮影、全体写真撮影を行う。

3月12日～17日 駆力線撤去工事、ベルコンの片付けを行う。各遺構の実測、写真撮影を継続する。

3月19日～24日 遺構実測、排水溝十層尖削を行いS E 101の調査を完了した。資材片付け、23日遺物、資材を搬出し、24日に現地調査を終了した。

#### 整理作業

昭和58年7月～10月、遺構出土遺物から水洗を開始する。次いで注記、土器接合・復元作業を行い、あわせて、遺構図面の整理を終了する。

11月～12月、含包層出土遺物の水洗、注記を引き続いて行う。遺構の挿図原稿作成にとりかかる。

昭和59年1月～3月、遺構トレースを行い、あわせて2月末より58年度調査分の遺構挿図原稿作成・トレースを行う。

図版作成し原稿執筆、編集作業に入り3月下旬に印刷し、3月30日で業務を完了した。

## 第 II 章 位置と環境

### 第 1 節 地理的環境

静岡・愛知県境の高ノ巣山(661.5 m)に源流をもつ都田川は引佐町の峡谷を南下し浜松市都田町から沖積平野に入り三方原台地に向い、そこから大きく西に流路を転じ細江町中川地区を貫流し引佐細江に注いでいる。この都田川は、静岡県内では太田川・菊川・狩野川といった河川にみられるように、大きく蛇行し、その両岸に自然堤防が発達して排水の良い褐色低地土壌を堆積させその背後には後背湿地を形成して水はけの悪い細粒グライ土壌が分布する等の特徴をもっている。

この都田川が形成した沖積平野は北に標高 200 m 程の丘陵と南の三方原台地に狹まれており、前者は古生界の地層と第四紀洪積世の堆積物からなり、後者は天竜川が形成した礫層からなる洪積台地である。これらの地形のいつれにも河岸段丘がみられ、又台地縁部には集落、古墳等が営まれる。以上のような景観に囲まれた都田川の沖積平野は、平野部に接する浜松市都田町須部付近の水田面で海拔約 18 m、細江町気賀の三角州水田面が約 2 m を示し、この間約 10 km で標高差 16 m という数値を示す平野であり、丘陵と台地間が約 100 m ~ 200 m という小峡谷に区切られて、3 つの低地からなっている。上流から①峡谷を流れた都田川平野と接する地域、浜松市都田町中野須部付近、②浜松市都田町吉影一色付近、③細江町中川付近及び河口の三角州の 3 地域があげられる。

現地形、及び自然堤防上の土地利用からこの 3 地域を相互に比較するなかで現出遺跡の立地について観察をしてみよう。これらの地域の自然堤防は現流路にそってみられ、①では流路が平野に接する位置で、ほぼ直角に屈曲するため、西半部に自然堤防が発達し、②では川の北岸吉影地区にみられ、対岸の山東地区には現流路に斜行する自然堤防がみられる。③の中川地区では、茂塚、森地区において河川改修前の旧河道が認められているが、他の地域との相違は上流から祝田、田木寺、船頭、提花、茂塚、森、川久保といった集落を乗せていることであり、特に北側において自然堤防の発達が著しく現堤防から約 100 m 程の巾をもって果樹園、畑等に利用されている。尚この自然堤防の背後には、水田造成のため削平されたと推定される自然堤防の痕跡が果樹園、荒地等として残っている。

都田川の沖積平野における自然堤防は、細江町中川地区において広範囲にみられ、寺院人家の存在にみられるように長期間安定した場所であったことを推察させる。水田面に接する低位の河岸段丘も④とした地域を囲む細江町岡地、広岡地区、引佐町金指地区に形成され、この地域から細江町気賀地区にかけては引佐郡内でも最も人家が密集する地域である。上流の①②の地域にも低位の河岸段丘はみられるがいづれも狭い範囲に帯状に形成されている。三方原台地の裾部にも分散した集落が営まれるが河岸段丘の顯著な発達はみられない。

以上のように都田川の沖積平野を自然堤防の観察を中心にして述べてきたが、最後に崩廻の遺跡の分布からみて、河口の三角州の付け根にあたる位置にも市場遺跡といった弥生時代の遺跡が存在することからこの地域までは自然堤防が形成されていたとの推定も可能であろうと思われる。河口の三角州は、近世以降に開拓されたといわれており、遺跡の存在は認められていない。

註 1. 地学団体研究会静岡支部編著『静岡の地質をめぐって』桑田書館 1981

註 2. 長谷和弘『都田川流域の遺跡』細江町教育委員会 1981

## 第2節 歴史的環境

本遺跡の所在する都田川下流域は沖積平野と、その周辺の丘陵縁辺部に縄文時代以降歴代の遺跡が営まれており、遠江地方において早い時期から開けた地域である。以下にこの地域を時代ごとに概観してみることとする。

### 縄文時代

都田川下流域において遺跡の営まれるのは縄文時代に入ってからであるといわれ、常道・小野・右岡・上半・広岡・宿名・岡ノ平といった遺跡があげられている。これらの遺跡のなかで宿名・岡ノ平遺跡は、三方原台地北縁部に位置するが、他の遺跡は沖積平野の北側丘陵縁辺部や段丘上に分布をみせ、特に井伊谷川が貫流する引佐町井伊谷地区から細江町気賀付近に集中している。堂道・小野といった遺跡が中期には成立していたようであるが、資料が少く明確な把握はされていない。岡ノ平遺跡は縄文晩期から弥生時代後期まで続くこの地域では最も主要な遺跡であり、沖積地との比高差は僅か2~3mの段丘上に立地し、晚期後葉を中心とした上器や、打製石斧、石鐵等が発見されている。

### 弥生時代<sup>註1</sup>

遠江地域において、この都田川下流域や、三ヶ日町付近から稻作が開始されたものらしく、山よりの谷口に近い湿地が初期の生産の場であったのである。先述の岡ノ平遺跡は縄文時代から弥生時代に継続しており、弥生時代への移行期の様相を示している数少ない遺跡である。このように成立した弥生文化は稻作生産の拡大に伴って沖積平野の微高地に集落を営むようになる。これは初期の小谷入口付近の泥地帯での水田經營から、自然堤防の背後に広範囲に広がる後背湿地での水田經營への移行という生産形態の転換を示すものであろうが、この転換の時期は表探査資料から弥生中期といわれている。特に、今回調査を行った本遺跡出土土器のなかに、長床式とおもわれる壺棺が発見され、中期後半期にはすでに墓塚を形成する集落が、自然堤防上に営まれたことも推定可能であることから、低湿地帯への進出の時期に一つの示唆をうけた。本遺跡については過去に遺物が採集されておりなかでも故月岡準三氏のコレクションのなかに手培形土器がみられ類例が少い貴重な資料として知られる。

最近都田川河川改修工事に伴う調査が昭和56・57年に実行され、自然堤防上に立地する遺跡群の時期、性格等が明らかにされつつある。昭和57年の冬に行われた川久保遺跡の調査では5世紀代の堅穴住居跡<sup>註2</sup>・軒、井戸と推定される遺構1基（中世）・溝・ピット群（中世）が確認され、銅鏡、8世紀の一括土器及びそれに伴った陶馬、山茶碗、施釉陶器が出土し、この調査区においては弥生後期から自然堤防上への進出が認められ、特に、奈良～中世初頭期の遺物が最も多く出土している。

弥生時代の都田川下流域について特筆すべきこととして、6個の銅鐸が沖積低地及び台地縁辺の小谷<sup>註3</sup>から発見されていることがあげられる。このうち2個は中川船渡地区的旧都田川右岸からの発見である。以上のように弥生時代のこの地域は遠江地方において成立期から、重要な位置を占めており、それが、北岡大塚等の4世紀～6世紀代の古墳造営期まで連なるのである。

### 古墳時代

古墳は三方原台地縁辺部、北側丘陵地井伊谷地区付近に分布している。この地域の古墳の出現は井伊谷に所在する北岡大塚古墳といわれ、全長、46.5mの前方後円墳であり、4世紀後半に築造され、次いで5世紀には馬場平古墳（前方後円墳、全長42.5m）・谷津古墳（円墳、直径約40m）といった首長級の大型墳が連続して築造されている。これらはすべて井伊谷地区に集中し、都田川下流域を望む丘陵上に古墳が出現するのは、5世紀後半の陣座谷古墳からである。これは三方原台地北縁部の海拔約6mの地点に築造された全長約53mの前方後円墳であり、大正4年旧中川村民により主体部が発掘され、変形獸文鏡と数本の鉄刀が出土した。墳丘には円筒埴輪がめぐり、なかには須恵質の埴輪が存在するという。



第1図 遺跡位置図

# 遺跡名一覧

No.	遺跡名	時期	遺構	出土品	No.	遺跡名	時期	遺構	出土品
1.	御用遺跡	-	-	漆器、土器	18.	山久保遺跡	弥生～古墳	-	馬鹿上石、輪滑、土器
2.	古墳群	古	円墳、横穴式石室	-	19.	山久保遺跡	-	外	牛頭
-	1号墳	-	円墳	-	20.	御用名跡	至	山久保走、井戸	洋江上
-	2号墳	-	-	-	21.	荒川	1号墳	古	横穴式石室
-	3号墳	-	-	-	22.	-	2号墳	-	円墳
-	4号墳	-	-	-	23.	-	3号墳	-	-
-	5号墳	-	-	-	24.	-	4号墳	-	-
3.	田代知社遺跡	古	円墳	漆器、土器	25.	月伊良城跡	古	北側、空洞、土器	石器、石器
4.	古墳群	古	横穴式石室	-	26.	月伊谷遺跡	古	-	文
-	1号墳	-	円墳	-	27.	北原河内遺跡	-	-	石器、刀劍
-	2号墳	-	-	-	28.	ノ瓦	1号墳	古	円墳、飛石
-	3号墳	-	-	-	29.	馬場半吉塚	古	堆積、前方後方墳	銅鏡、鉄器、刀劍、輪滑、菅草、巴形石器
-	4号墳	-	-	-	30.	日山寺古墳	古	-	-
-	5号墳	-	-	-	31.	空造遺跡	古	堆積、横穴式石室	鐵文十器、石器
5.	御野遺跡	弥生～奈良	円墳、横穴式石室	石器、輪滑、土器	32.	正東上遺跡	古	-	石器、石器、輪滑、土器
6.	古都C群	古	横穴式石室、横穴式石室	漆器	33.	小野	1号墳	古	堆積
-	1号墳	-	円墳	-	34.	小野遺跡	古	-	石器、刀劍、石器
-	2号墳	-	円墳	-	35.	小野古墳	古	堆積	-
-	3号墳	-	円墳、横穴式石室	漆器、土器	36.	小野遺跡	古	牛頭	骨牛十器
-	4号墳	-	円墳	土器、五輪、铁刀	37.	山向朝日遺跡	-	-	-
7.	夷	1号墳	古	横穴式石室	38.	心	1号墳	古	堆積
-	2号墳	-	円墳	-	39.	山向	2号墳	古	-
-	3号墳	-	-	-	40.	山向遺跡	古	堆積	鐵文十器、石器
8.	赤道跡	古	-	-	41.	室生遺跡	古	-	-
-	1号墳	古	石器、石器	-	42.	五日山古墳	古	堆積	-
-	2号墳	-	-	-	43.	室生寺前遺跡	古	食	上耕
-	3号墳	-	-	-	44.	室生寺古墳	古	堆積	-
9.	赤坂山	1号墳	古	円墳	45.	近野遺跡	古	-	石器、刀劍、石器
-	5号墳	-	-	-	46.	氣賀城跡	古	-	-
10.	波瀬山八郎	2号墳	古	横穴式石室	47.	上平遺跡	古	-	石器
-	3号墳	-	横穴式石室	-	48.	上町	1号墳	古	堆積
-	4号墳	-	-	-	49.	上町	2号墳	古	-
-	5号墳	-	円墳、横穴式石室	-	50.	上町	4号墳	古	堆積
-	6号墳	-	-	-	51.	上町	1号墳	-	-
-	7号墳	-	-	-	52.	御用遺跡	古	空塗	-
-	8号墳	-	-	-	53.	上町	2号墳	古	土器、刀、輪滑器
-	9号墳	-	円墳	漆器	54.	御用名跡	-	-	漆器、石器
-	10号墳	-	-	-	55.	ツツガマ遺跡	古	土器	輪滑
-	11号墳	-	-	-	56.	七日遺跡	-	-	-
11.	赤坂山古墳	1号墳	古	横穴式石室	57.	忍ケ谷遺跡	-	-	-
-	2号墳	-	-	-	58.	御用ヶ谷	古	円墳	-
-	3号墳	-	円墳、横穴式石室	-	59.	上町	3号墳	古	前方後方墳、周參、漆器、鐵、刀身
-	4号墳	-	円墳	-	60.	不動平遺跡	古	堆積	-
12.	御用古墳	古	横穴式石室	漆器	-	-	-	-	-
13.	御用古墳	古	横穴式石室	漆器、土器	-	-	-	-	-
14.	御用古墳	古	横穴式石室	漆器	-	-	-	-	-
15.	虎尾古墳	弥生～古墳	横穴式石室	漆器	-	-	-	-	-
16.	田代知社遺跡	-	-	漆器	-	-	-	-	-
17.	高瀬	-	-	漆器	-	-	-	-	-

この三方原台地北縁部には5世紀後半から6世紀中葉に直径20~30mの円墳（陣内平・抓塚・中平）がみられるが散在的に分布し、上体部は木棺直葬、埴丘には埴輪をめぐらしている。遠江地方への横穴式石室の導入期である6世紀中葉以降は北側の丘陵上の金指、石岡、広岡等の地域に小円墳が築かれるがその数は少く、むしろ大庭川の形成した広範な冲積地を望む、三方原台地縁辺に沿った造営活動が展開されている。

この時期の都田川下流域の各集落は弥生時代から継続して営まれたと考えられるが、祝田遺跡においては古式土師器の段階で遺物の量は極端に少くなり、それ以後は7世紀代の須恵器が僅かに出土しているのみである。先述発掘調査された川久保遺跡においても同様の傾向が見られ、古墳時代を通じてこの地域の集落の様相は不明な点が多い。

### 秦 良 時 代

川久保遺跡において、8世紀代の土器が一括して出土しており、そのなかには陶馬等も含まれていた。<sup>註5</sup>それに伴った土器群の性格は不明であるが付近には条里制造構も存在し、この時期には再び都田川の低地における活発な人々の動きがみられる。倭名抄によれば引佐郡に、京田郷、刑部郷、渭井郷、伊福郷の四郷の存在が知られており、それぞれの比定地は、浜松市都田町、細江町中川、引佐町井伊谷、細江町気賀といわれ延喜式の式内社6社もこの地域に分布する。祝田遺跡においては奈良時代の遺物はほとんどみられず、都田川下流域での自然堤防上の位置によって相違するようである。

### 平安時代～鎌倉時代以後

この時代の遺跡は少いが、祝田、川久保遺跡では溝、土坑、ピット群と多量の山茶碗を出土している。また森遺跡の対岸に設置された三和排水機場建設工事では、「寺」の墨書き器が発見されている。発見者である柳瀬次多郎氏によれば多量の山茶碗が伴ったという。このようにみれば祝田遺跡と川久保遺跡の間、田米寺・茂塚・森・諸遺跡も当該時期の土器が採集されることから、この地域において平野の中央を流れる都田川沿の地域が重要な位置を占めていたと推定される。

神鳳鈔に、伊勢内宮の御厨として、都田御厨、刑部御厨、祝田御厨等の名がみえ、遠江から渥美半島、伊勢湾一帯が広く伊勢神宮の領有する御厨となっていることが知られている。静岡県史によれば、これらの御厨閣でも、伊勢神宮を介して、物質の交流が行われ、物資の輸送は主として船を使用したとされている。これ以降の中世末へ近世にかけては井伊氏、蜂前神社の徳政文書等貴重な文献が存在するが、考古学上で注目されるのが、初山宝林守境内、およびその周辺に分布する初山古窯跡群がある。昭和58年度には国道工事に伴い釜下古窯跡の調査が行われた。祝田遺跡においても、初山古窯群の製品と類似が出土している。県内陶磁史のうえからも貴重な遺跡である。

註1. 向坂綱二『信濃』第19巻1号 1967

註2. 「川久保遺跡はか発掘調査概報」細江町教育委員会 1982

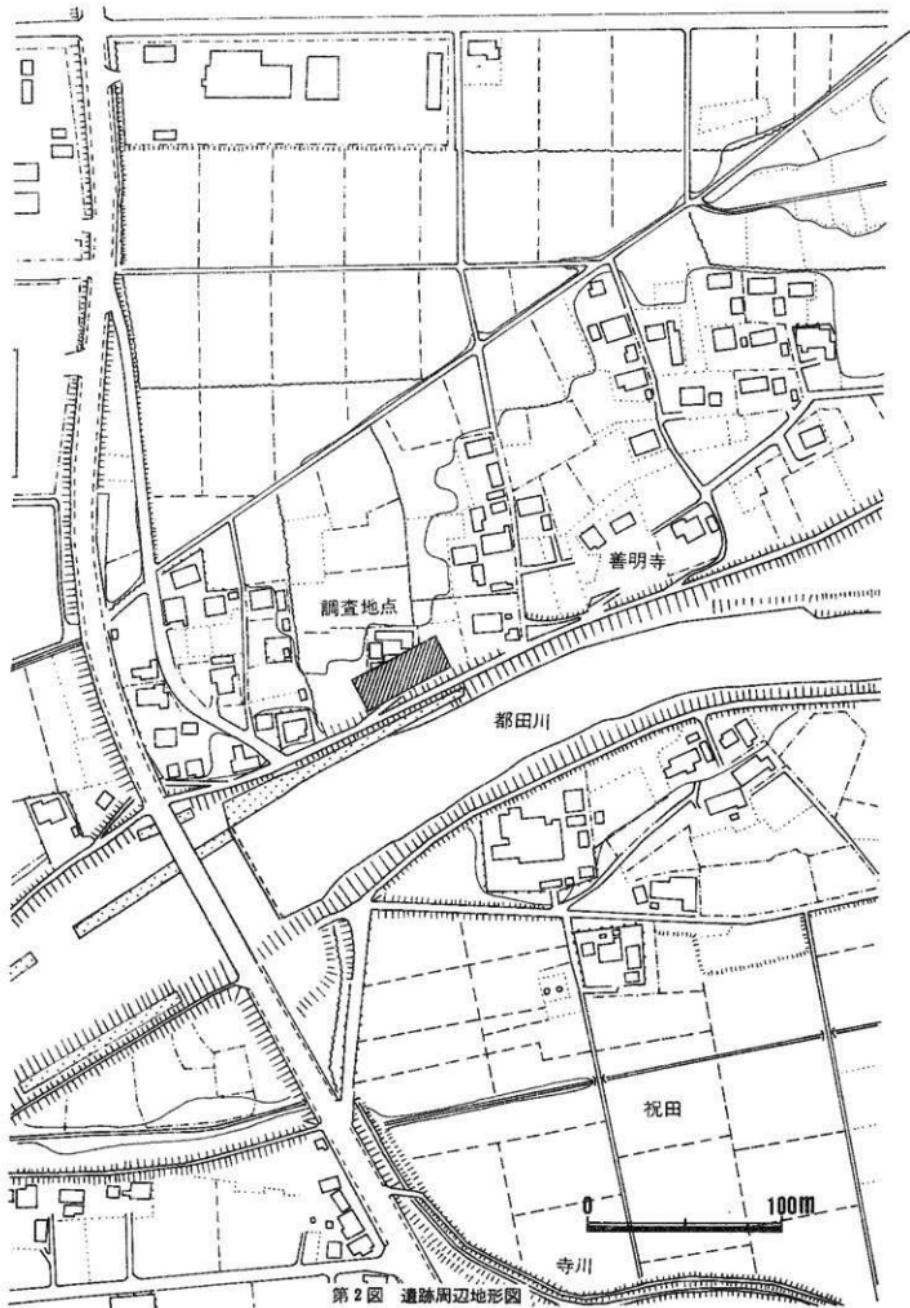
註3. 「引佐郡細江町中川地区銅鐸分布調査報告」静岡県教育委員会 1969

註4. 長井弘『引佐町の古墳文化』II 引佐町教育委員会 1981

註5. 註2に同じ

註6. 取川学『遠江國引佐郡における条里制の遺構』『愛知大学文学会・文学論叢第30編』 1965

註7. 静岡県史 I



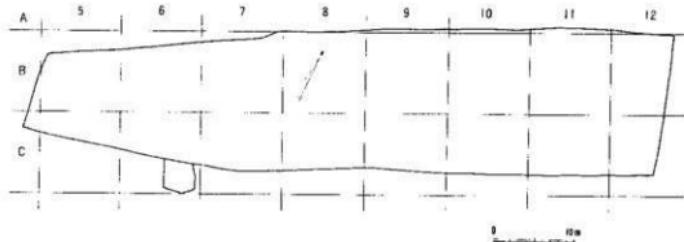
第2図 遺跡周辺地形図

### 第3節 発掘区の土層

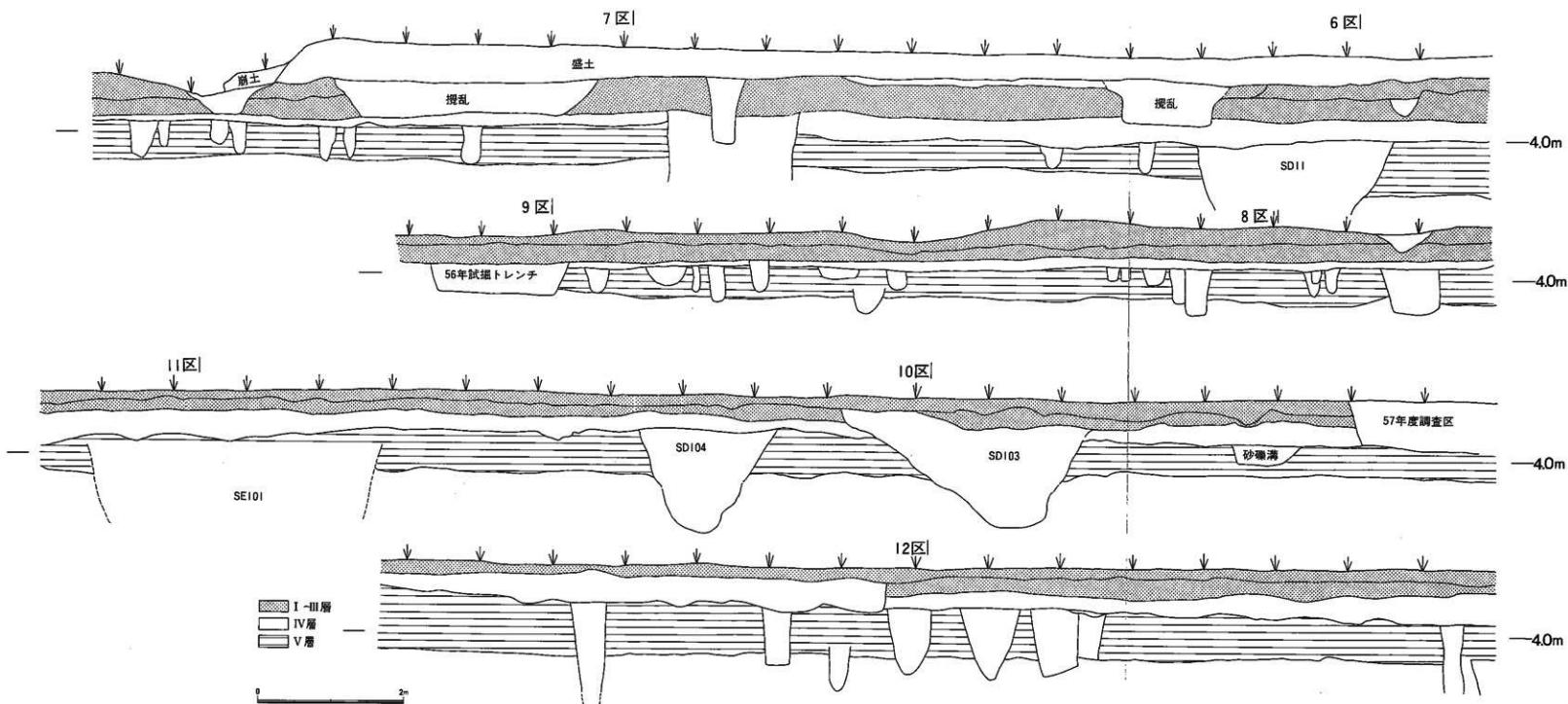
発掘区内都田川の河川堆積物と宅地部分の盛土からなり、盛土以下は、砂質土と、粘質土の互層で、基盤となるVI層より部分的に青色砂が入り、還元がすすむ。また発掘区内のB・C-12区付近では、V層も還元し、S X 107～110のような水が闇汚したとおもわれる遺構の周囲も青灰色に変化していた。

基本層序は以下のとおりである。

- I層 表土、褐色で砂質分が多い。小礫が混入する。宅地と果樹園に利用されていた。
- II層 褐色土、明るい色調の黄褐色粒質土はば均一な土層で礫を混入する。
- III層 暗黃褐色土、II層よりやや暗い砂質土。
- IV層 暗褐色土、礫、炭化物等混入物多く含み、色調も不安定である。中世遺物包含層。
- V層 黄灰褐色粘質土、粘質土でしまがりが強いが、細砂も含む、均一な色調を呈する。木棺の土面から中世遺構が検出され最下部から弥生時代～古墳時代初期にかけての遺構が検出された。
- VI層 黄褐色砂質土、V層より黄色味つよく白色粒子を含む。



第3図 グリット配置図



第4図 発掘区(南壁) 土層図

### 第三章 遺構

#### 第1節 弥生時代～古墳時代初頭の遺構

調査された遺構はV層下部からVI層にかけて検出され、発掘区での分布をみると東半に集中し、特にB・C-10・11区に多くみられた。なおB・C-9・10区は後世の大型の溝により消滅している。調査した遺構の種類と数は以下のようであった。

溝15本、方形周溝墓3基、土坑状遺構18基、ピット群

##### (1) 溝

弥生時代～古墳時代初頭の溝は15本検出され、その形状からA・Bの2類にわけられる。A類は、巾約0.5m前後断面逆台形を示すもので、S D14～16・22・23・123・125～128・132・133の11本が検出された。B類は巾1m以上の断面U字形を示す太い溝で4本検出され、発掘区中上部のB-9区にS D114が所在し、他の3本は東端のB-12区に集中していた。S D129・130・131。

###### 溝 A類

###### S D14 (第6図)

C-7区で検出され巾1.5m、長さ6.5m断面はU字形に近い形状で、覆土は暗黄褐色土で粒状の菅鉄を多量に含む。やや東西方向を向き、S D15とは直角に交わる配置となり、本来は同一の溝の可能性も推定されたが、今回の検出では2本の溝と判断した。

###### S D15 (第6図)

S D14よりやや巾広く1.8m、長さ7mであるがほぼ断面の形状も類似する溝の底が段状に認められたが、明確な段とは認めがたくゆるやかな曲をもっている。南北方向に長い溝でS D14の方向に直交し、覆土も類似する。なお遺物はS D14とともに全く出土しなかったが、位置、形状、規模から、両者の類似性は注目される。

###### S D16 (第6図)

S D16はS D14・15の北、約1.5m先に屈曲部があり、そこから北に5.7m延る最大巾2.65m、最少巾1.6m断面は底が平坦となるU字状を呈する。L字状に屈曲する溝であり、底のレベルはほぼ同一、覆土はS D14・15と同じ暗黄褐色土で遺物は弥生土器片が数点出土したのみであった。

###### S D122 (第8図)

B-11区、発掘区外にのびる巾0.4mで南北方向にのびる溝で、長さ254mが検出されている。断面は底が平坦な逆台形を呈し、南端に向ってやや東に曲る。覆土は上下2層に別れ、レンズ状の堆積が認められた。この溝は他のA類の溝と比較して、約5～10°程西へ偏っていることが大きな相違点としてあげられる。

###### S D123 (第7図)

S D16と類似し、ほぼ直角に屈曲する溝であり、S D16とは逆に東方向へ鋭角的に屈曲する。最大巾0.45m、最少巾0.37m、長さは南北に3.4m、東西は1.9m断面U字形を呈する。覆土は2分層されレンズ状の堆積が認められるが色調の相違が僅かにみられる程度で顕著な差異は認められなかった。遺物は土器片が数点出土したのみであった。

###### S D125 (第8図)

B-11区東で検出された巾0.38m、長さ1.88m、南北方向に走り、断面V字状で底に弥生土器片が出土した。S D123・126の方向よりやや面に偏る。南端はピットに切られ、覆土はやや暗い褐色土で他

のA類の溝と類似するものであった。

S D 126 (第7図)

S D 123とS D 125の中間にあり、今回調査したA類の溝中最も小規模であった。巾0.2m、長さ0.53m底部がわずかにくぼむ。

S D 127 (第7図)

C-11区・S X 122に南端が切られる。巾0.3m、長さ1.95mで中央南でやや西に曲る形状が認められ断面逆台形を呈する。これに平行して、S D 128が検出された。

S D 128 (第7図)

S D 127の東にあり約0.2~0.3mの間隔で、ほぼ平行に走る。S D 126と同規模の溝であり巾0.23m、長さ1.63mが確認された。

S D 132 (第5図)

B12区南で検出されたS D 129・131に切られた溝で、他の溝とは方向を異にし東西方向に走る。巾0.54m、反さ2.2mが確認されているが、東西の長さは、S D 129と131を横断していないことから5m以内であったことが推定される。断面形状は逆台形を呈し、掘方の上端は南北ともに平行に走り他の溝に比較して、直線的な上端をもっている。覆土は、他のA類の溝とほぼ同様のやや暗い褐色上であった。遺物は弥生土器片が数片出土したのみである。

S D 133 (第5図)

北端をS D 129に切られ、またこの付近のV層が青色に環元されていたため、南端の確認はできなかつた。巾0.3m、長さ2.6mの断面逆台形を呈する溝でありやや東西方向に湾曲する。

以上A類とした溝についての形状をみてきたが、覆土及び方向についての把握をしてみたい。覆土はほとんどが、暗褐色及び、暗黄褐色を呈し、ごく微量の炭化物、焼土を混入する一部に礫を含むが、ほぼ均一な覆土をなし基盤となるV層、黄灰褐色粘質土よりやや暗い色調を呈する。また覆土はほとんどが一層のみで分層可能なのはS D 122・S D 123のみであり、レンズ状の自然堆積が認められた。溝の方向を整理すると以下のように4つのタイプにまとめてみることができる。

1. 西に約25°前後傾くもの 6本 S D 15・125・126・127・128・133
2. L字形をした溝で、長辺が西に約15°傾く 2本 S D 16・123
3. 西に約30°前後傾くもの 1本 S D 122
4. 西に110°傾くもの 1本 S D 14

## 溝 B類

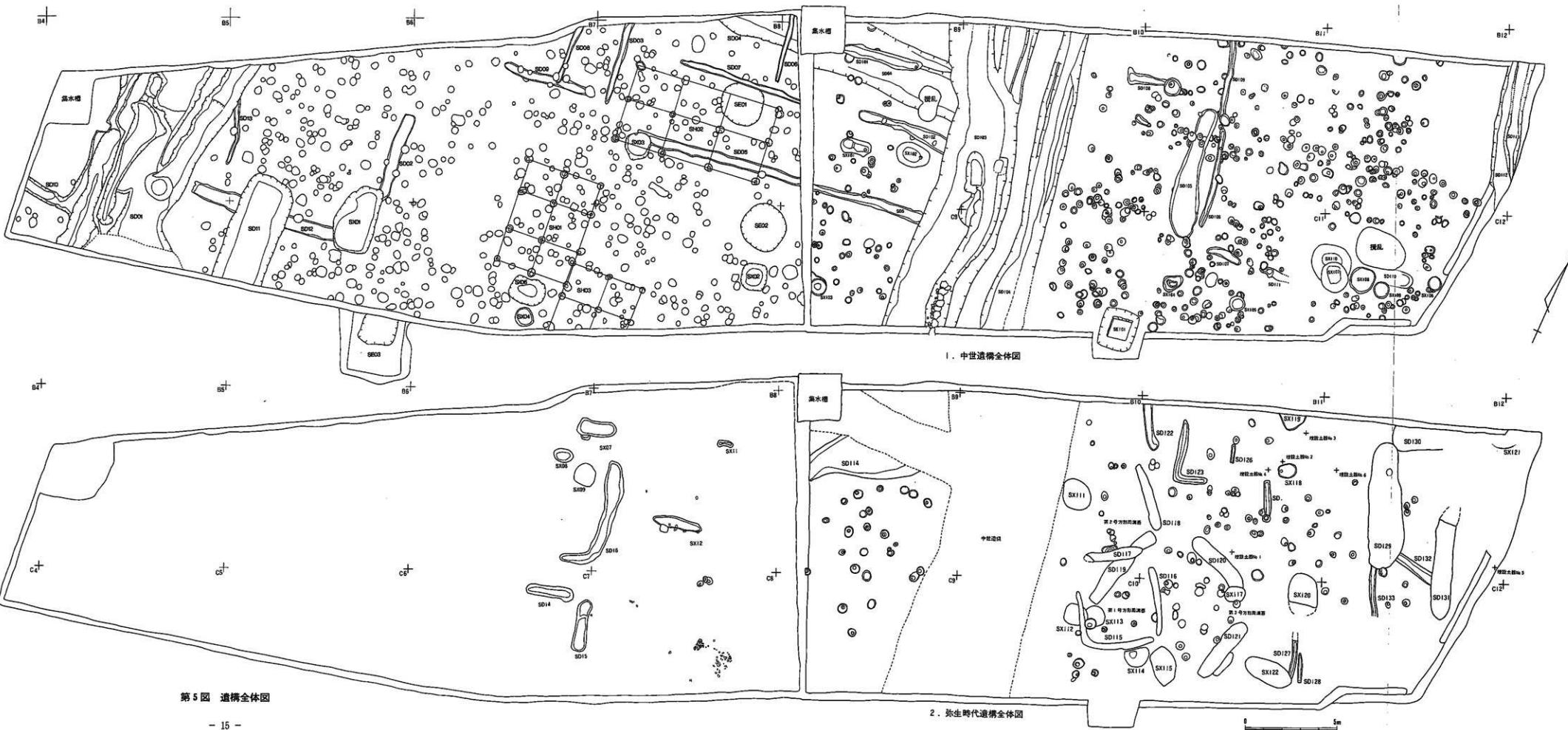
S D 114

B類とした巾1m以上の大型の溝は主としてB-12区より4本中、3本の溝が発見されている。S D 129・130・131であり、他の1本のS D 14はB-9区より発見された。覆土はA類とした溝より、黒褐色味が強く炭化物、焼土を多く含み、遺物の出土量も、多い点が相違する。

S D 129 (第7図)

B-12区の中央より西に位置した長楕円形状の溝であり、最大巾2m、長さ6.62m、底面に部分的な凸凹がみられるが、断面はゆるやかな「V」字形を呈する。細部の形状をみると中央より北側の掘方がゆるやかに曲り、南端の東側が弧状に湾曲し、北端は半円状に掘られている。覆土は四層認められ、暗褐色土を基調に底付近に基盤層に含まれる灰色粘土のブロックが混入し、やや明るい色調の黄褐色土であった。

遺物は、南半部の東側と南端部に集中して出土した。そのうち、後者の土器は、東西1m、南北1.2mの範囲に認められ、1個体に接合可能な土器は今されていなかった。弥生時代後期とおもわれる。



### S D 130 (第7図)

発掘区東境で発見され、一部区外へのびるため、その形状・規模等は不明である。覆土は三層認められたが、遺物は少且弥生土器が出上したのみであった。

### S D 131 (第7図)

S D 129の東、1.8mに存し S D 132を切り北端は還元土壤の青灰色粘土が発達し、全体の平面の形状は不明であるが、巾は約1mである。

覆土は暗褐色上であり、黄褐色をおびる部分もみられた。

### (2) 方形周溝墓

#### 1号周溝墓 (第8図・図版第II)

S D 117・118から成るもので、独立した二本の溝より成っている。位置及び断面の形状から方形周溝墓と判断した。B-10・11区に位置し、S D 118は北北西に向く、S D 117は北北東に向く。S D 117は3号周溝墓のS D 118を掘りこんでいる。

形状は、平面では端部が丸くなり、断面は底の狭いU字状を呈し、規模はS D 118で、長さ3.66m、巾0.5~0.6mで、検出面からの深さは0.2mを計る。S D 117は西端が弥生土器群に伴う掘り方により消失するが長さ3m前後巾0.65m、深さ0.6mを示す。S D 118より約0.2m程深くなる。

覆土はS D 117で、茶褐色砂質土を基調とし下層でやや灰褐色味をおびていた。S D 118の下層は黄褐色上であったが、基本的にこれらの土層は、他の混人物も含まず畠盤層のV層がやや灰褐色をおびていていた。主体部は検出されなかった。

#### 2号方形周溝墓 (第8図・図版第II)

1号方形周溝墓の南に位置し、北辺を欠きコの字状に溝をめぐらしている。L字形を示すS D 115と直線状のS D 116からなり、巾は0.3m~0.4mで、長さは前者の西辺が2.4m、南辺が、3.8m、後者は3.8mであった。検出面から底までが5~8cmと浅く、断面の形状はU字形を示していたものと推定される。S D 115は西辺がS X 112を切り南辺でS X 114を切っている。遺物は弥生式土器の小破片が出土したのみで、時期を明確に示すものではなかった。この2号方形周溝墓の方向は北に位置する1号の南辺を、東辺がほぼ一致している。覆土は暗黄褐色砂質土であった。

#### 3号方形周溝墓 (第9図・図版第II)

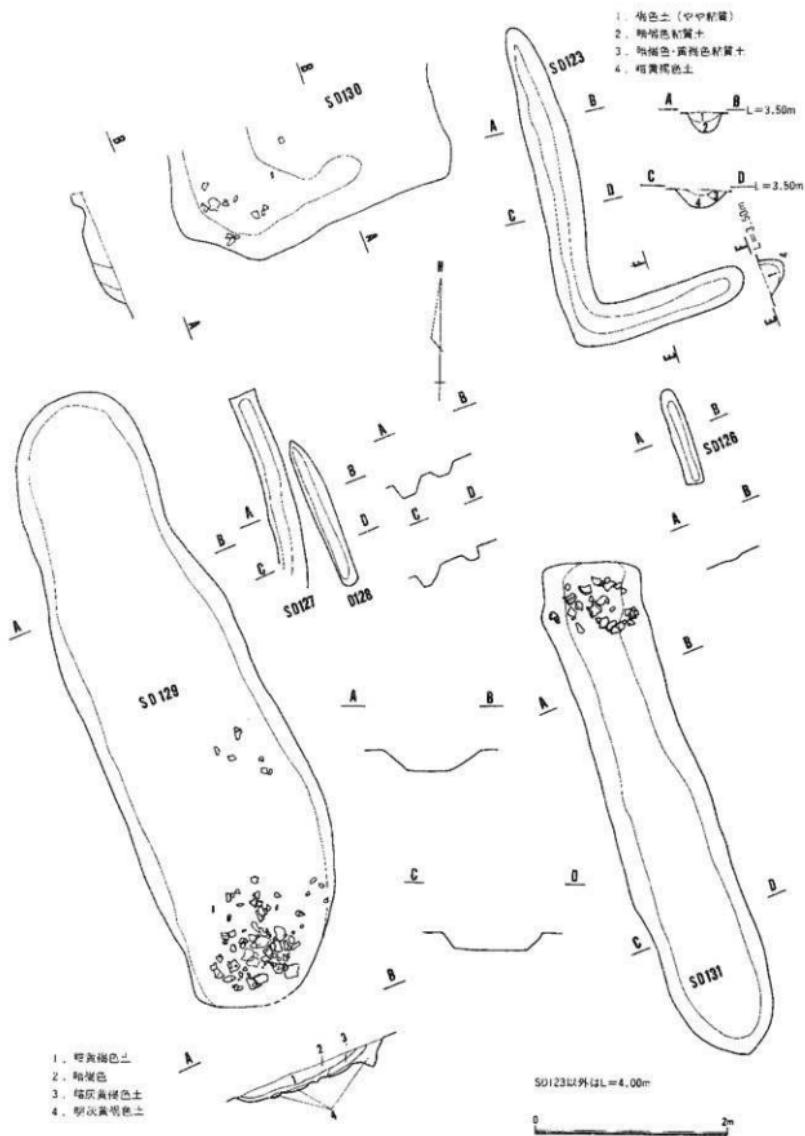
それぞれ完結したS D 119・120・121の3本の溝からなり0.5m~0.6mの掘方をもつ。辺の方向は1号、2号と比較し、約45°の傾きをもち1号のS D 117に切られている。各々の溝の長さは、S D 119が5m、S D 120がS X 117に掘りこまれており、残存長3.8m、S D 121は4.4mを測る。断面の形状は立ち上りがやや丸みをおびる逆台形状を呈し、三つに細別される上層が堆積していた。覆土はやや茶色味が強い暗褐色上であり他の混人物もなく安定した色調を呈していた。

遺物はほとんど出土せず、3基のなかでは深い掘方をもつため、主體部の検出に重点を置いたが検出されず、各々3本の溝中にも、それらしい痕跡はみられなかった。尚付近には方形周溝墓の溝の一部を構成する形状のS D 123も存在するが対となる溝は検出されず、方形周溝墓にはなり得ないと判断した。

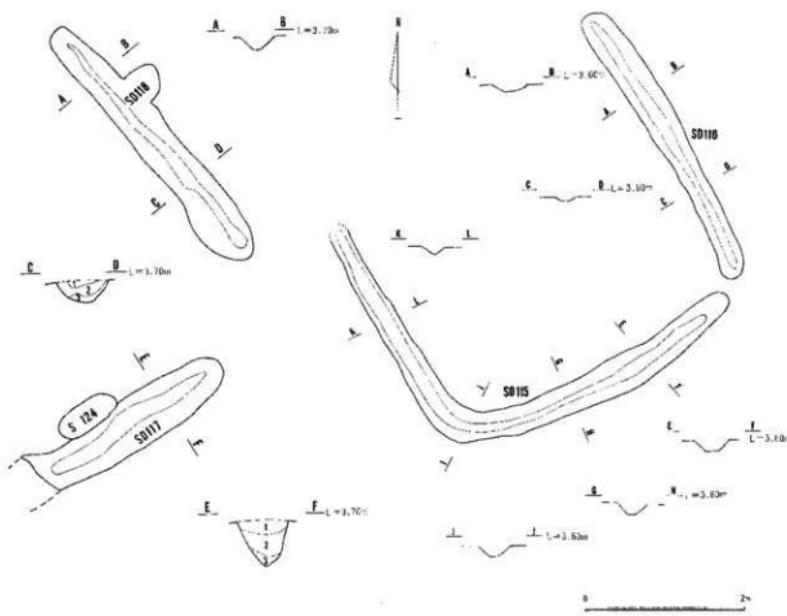
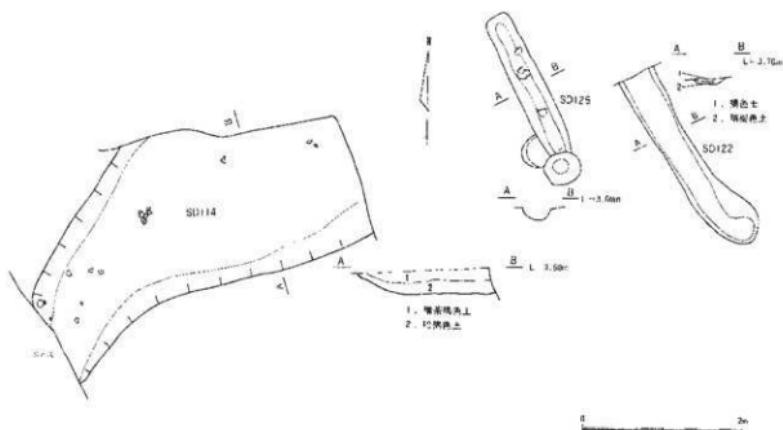
### (3) 土 坑

土坑は総数で18基を数え底に接して多量の土器を伴うものと覆土中から少量出土するものがある。前者は多量の土器と共に炭化物焼上を含みなかには礫を含むものもみられた。前者は、S X 09・111・112・115・117・121・122・129の8基であり、他はすべて後者に属し、両者ともに土層はレンズ状の堆積を示し、埋め戻された土層を示すと判断される土坑は認められなかった。以下に、多量の土器を伴う土坑から記述をすすめる。

#### S X 09 (第10図・図版第13)



第6図 弥生時代溝実測図1



第7図 弥生時代溝実測図 2 第1号・第2号方形周溝墓実測図

B-7区にあり、南辺がやや直線を呈するが他は円形の平面形状を示し、断面は東が一段高く段状を呈し、深い西側の部分に落ち込む内端は底よりやや丸味をもって喉につづく。遺物は下位に集中して出土し炭化物を多量に含む。遺物は高壠脚、小型壺、壺の破片が出土し器種別では壺が最も多い。小型壺は長頸の全形をヘラで研磨するものである。

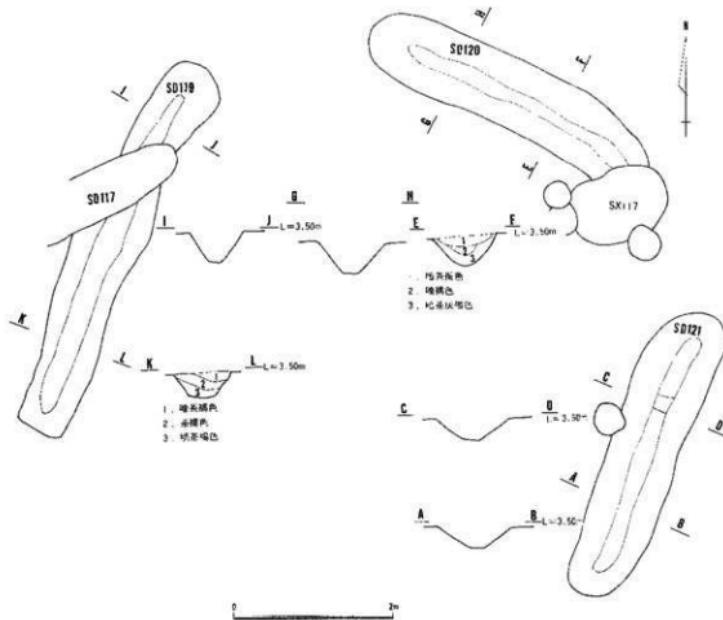
#### S X 111 (第10図)

S D 104と接する位置にあり、掘り方北と東が半円状を示す不整形を呈し、やや南北が長く、1.74m × 1.36m、深さ 5m を測る。断面の形状は底から壁にかけて急角度に屈曲するコの字形を呈する。このS X 111は検出面で多量の炭化物が混在し、土器片もみられた。土層をみるとこの上層中約 0.3m に、炭化物、土器片が多量に含まれ中間では、土器は極く少量含まれるのみであるが、下層の底に接する黄褐色土中に高壠の脚が出土した。なおこの層は、炭化物・焼土をほとんど含んでいない。

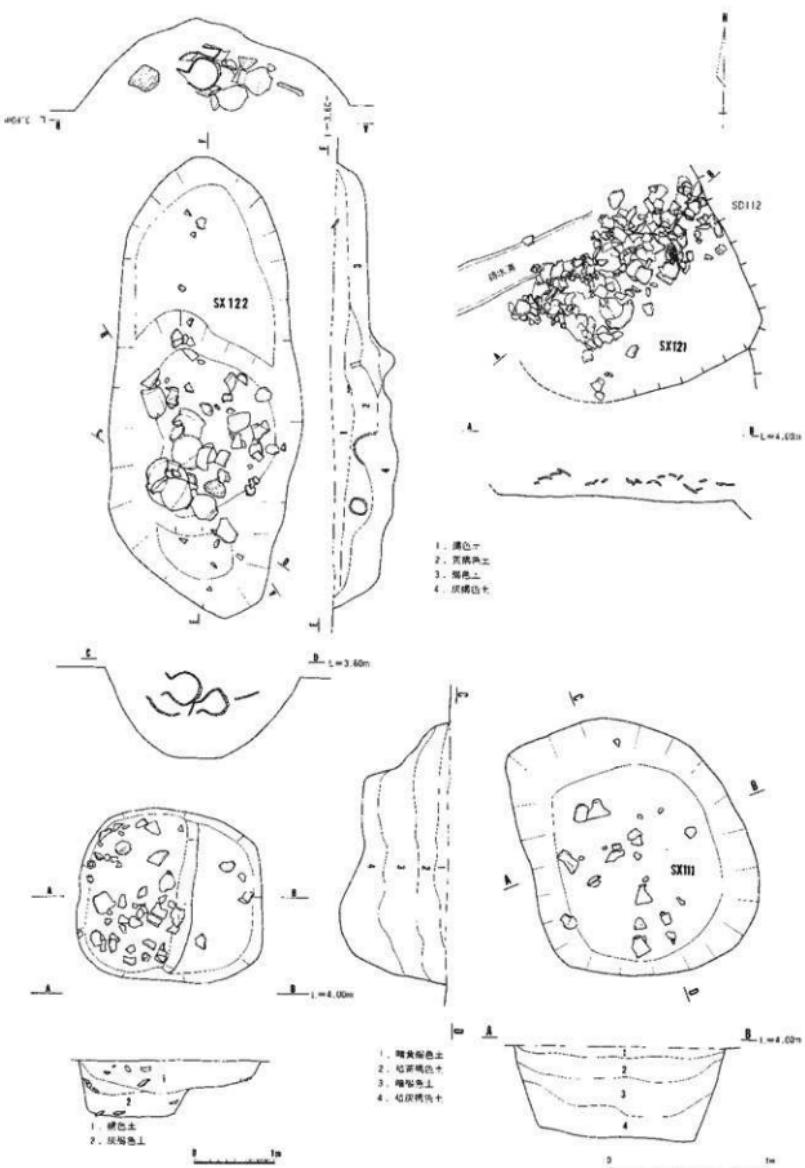
遺物は壺、甕、高壠の破片が出土するが、小片が多い。そのなかで器種が判明する数は高壠脚部4、甕6、小型甕1、甕10、であった。高壠については、壠部の破片が極く少く脚部が底付近に集中して出土する特徴が認められた。脚部は直線的に開くもの、ゆるやかに外反し、端部で内に屈曲するタイプが出土している。

#### S X 112 (第11図・図版第14)

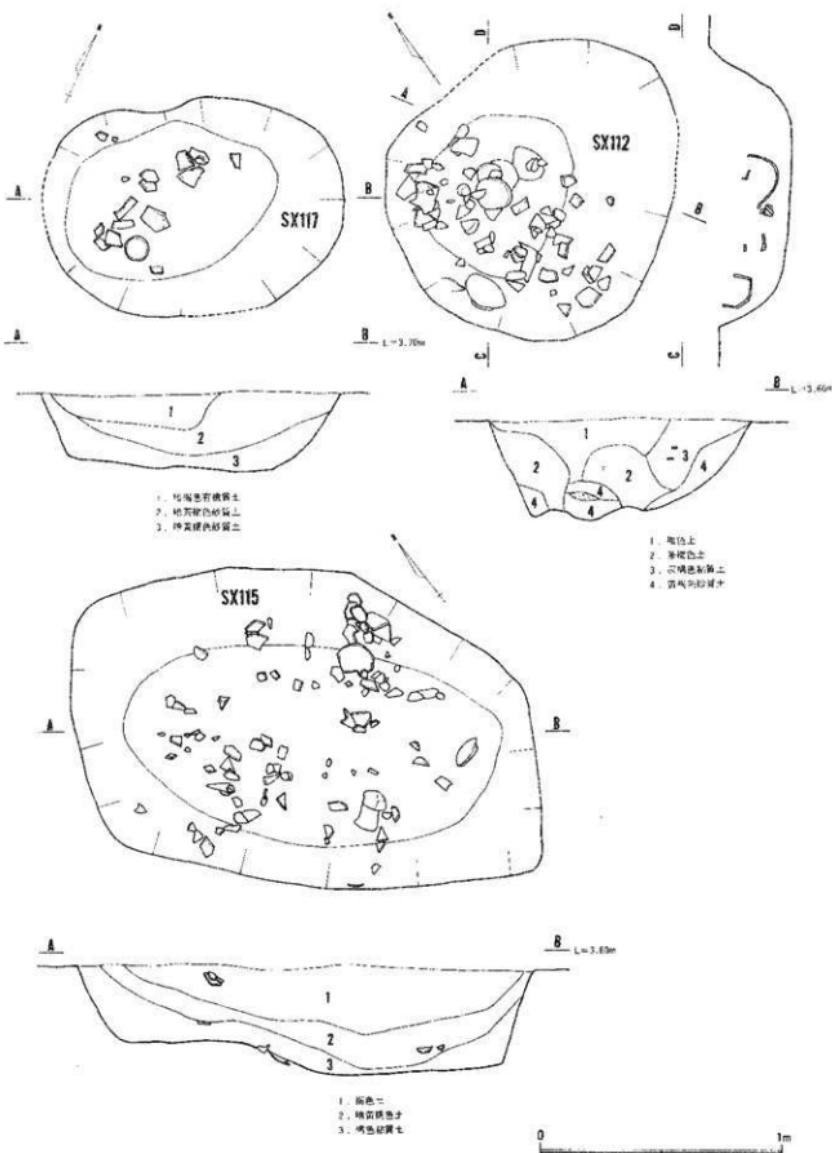
2号方形周溝墓を構成する S D 115によって上面を切られ、S X 113を掘り込んでいる。やや円形に



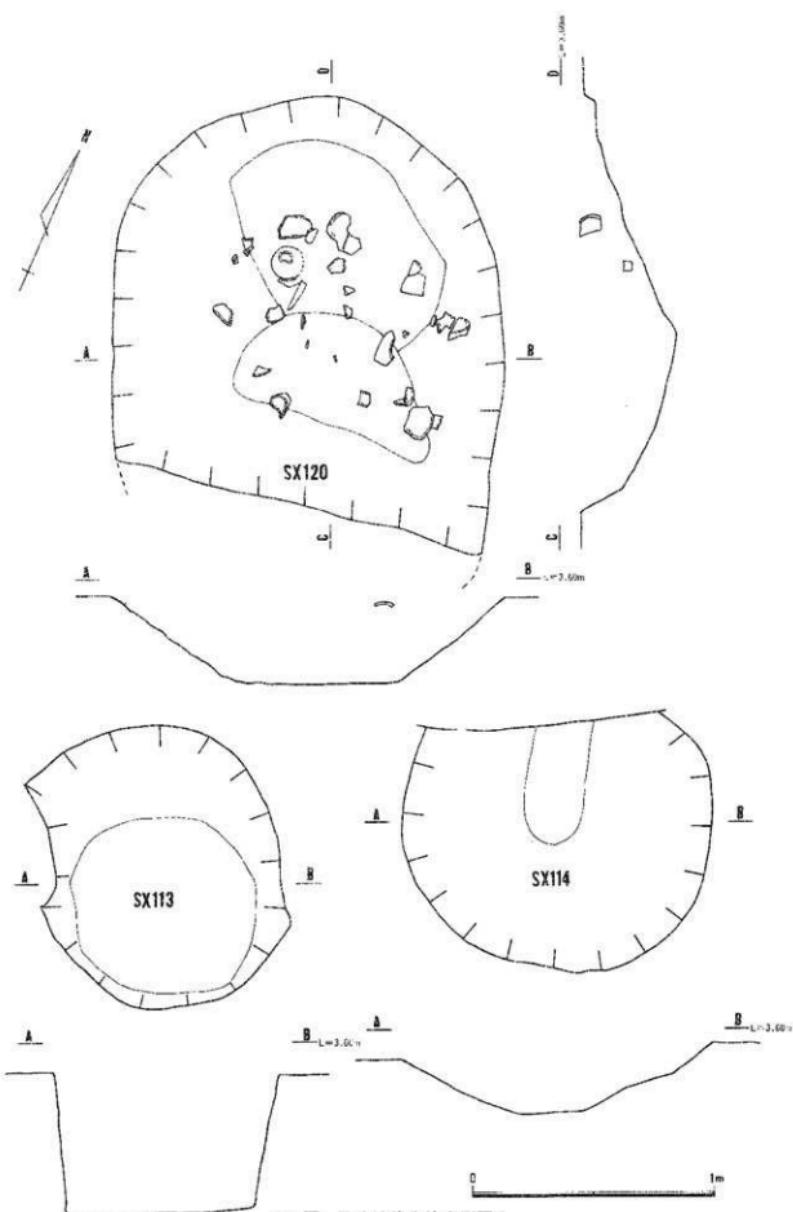
第8図 第3号方形周溝墓実測図



第9図 弥生時代土坑実測図1



第10図 弥生時代土坑実測図 2



第11図 赤生時代土坑実測図 3

近いプランを有し径は 1.1 m 程で、黄褐色土中に炭化物を多量に含み土器が出土した。断面の形状は底からゆるやかに壁に移行する U 字形を呈する。

遺物は土器のみであり、壺、甕、鉢、高坏等がみられ、壺の量が多かったが、接合された土器の器種別では壺 2、甕 1、高坏脚部 1、この他に破片ではあるが鉢も 1 個含まれていた。甕は肩部に波状文を施し、その下に棒状工具による刺突が行われるものであった。

#### S X 115 (第11図)

2 号周溝墓の南東隅に位置し、略方形を呈する形状を示し、断面は底からゆるく立ち上る U 字形である。約 500 片程の土器片が出土したが、小破片が多く、そのなかから器種の判明するものをあげると壺 5、甕 9、甕口縁部 2、高坏脚 1 であった。甕の口縁部は羽状刺突文を施し、複合口縁で、頸部から 90° に近い角度で外反する口縁部を有する。甕は 1 点を除きすべて口縁部に刻印が施される。

#### S X 117 (11図)

3 号周溝墓の東溝を構成する S D 120 の南端を掘り込む土坑であり、楕円形に似た不整形を呈し南北 0.7 m、東西 0.96 m、断面は、U 字形である。

約 0.3 m の掘方の上面、暗褐色有機質土中に多量の焼土、炭化物と共に土器が出土し、中間層の暗茶褐色砂質土中には、炭化物を極微量含むが、土器はみられず、下層の暗黄褐色砂質土中より少量出土するが、1 層からの出土が圧倒的に多い。

土器は、甕が最も多く口縁部 7、台部 2、他に高坏 1 であり他は小破片のみであった。

#### S X 121 (第10図・図版第14)

発掘区北東端 B-12、13 区の境で発見され西は還元土のためプランは明確ではなく、東は S D 112 により消失している。検出面で最も多く土器を出土し、底に近い位置では僅かに出土したのみであり土器に伴う焼土、炭化物は顕著ではなかった。

土器のうち器種の判明するものは甕 5、小型甕 1、高坏 1、脚部 3、甕 4、鉢 1 が認められ他は小破片のみであった。

#### S X 122 (第10図・図版第15)

C-11 区にあり、S D 127 を切る楕円形の土坑であり、2 つの土坑から形成されている。上器が多量に出土したのは東側の上坑であり、長径 1.85 m、短径 1.18 m であった。断面はゆるやかに立ち上る U 字形を呈し、土器は中央部の下層黄褐色粘質土中より多量の焼土、炭化物を伴って出土した。

土器の出土状態をみると他の土坑の出土例とは異なり、ほぼ完形の甕 4 個体が、底の東寄りに重なっており、他は散在する状態でこれには粘土ブロック、礫も伴っていた。他に底部を欠損する甕も 1 個体を出土した。

#### S X 120 (第12図)

C-11 区北東隅にあり、南半は S X 110 ~ 107 の影響をうけた還元土壌により平面の形状は検出できなかったが、長軸を南北に向けた楕円形と推定され、長径約 2 m、短径 1.3 m 程とおもわれる。

断面の形状は東壁が垂直に立ちあがるが全体に、擂鉢状を呈し、底は 2 段の面をもち、北側が約 0.1 m 程高くなる。

覆土は、最下層のⅢ層を除き、上部には焼土炭化物を多量に含み土器も多量に含んでいた。遺物は土器の小破片がほとんどであるが、器種の判明する個体数は、甕 7、小型甕 1、甕口縁 1、台部 5、高坏 3、他に上鏡 1 を伴っていた。甕の台部が圧倒的に多く、胴、口縁部は少く、甕、高坏も出土した量は少い。

多量の上器を出土する土坑は以上の、7 基であり、いずれも土器は炭化物、焼土を作り、覆土と、出土位置の関係は底付近あるいは、覆土上層であり、中間層からも破片の出土を見るが、集中的に破棄さ

れたのは、土坑を掘り上げた後と、ある程度埋没した後であることが土層観察の所見であった。以下に多量の土器を作わない土坑を列記する。

S X 07 (第5図)

B 7・8区の境に位置し、長径 1.9 m、短径 0.75 m の楕円形を呈する。U字形を呈する断面をもち底からゆるやかに立ち上っている。高壙の脚、壺の破片が出土する。

S X 08 (第5図)

S X 09 の北東約 0.5 m 離れた位置にあり、径 0.9 m の円形を呈する。断面はゆるやかな立ち上りをもつ壁で U字形を呈する。

S X 11 (第5図)

B 8区にあり、細長い不整形の土坑で、断面は U字形を呈し、長さ 0.88 m、短径 0.36 m であり、底は面をなす段があり、深さ 0.9 ~ 0.18 m であった。土坑と認定したが、その形状から溝の残存部の可能性もある。遺物は上器が少量出土する。

S X 113 (第12図)

S X 112 とピットに切られる土坑であり、径 0.95 m のほぼ円形を呈する。断面は底から急角度に立ち上るコの字状を呈し、深さ 0.5 m を測る。覆土は暗黄褐色の砂質土であり、部分的に、黄褐色ブロックが混入する。

S X 114 (第12図)

2号方形周溝塗を構成する S D 115 に北側から切られているが、径 1.28 m のほぼ円形を呈する。断面は捨石形を呈し覆土は暗褐色土を基調にして、やや、灰色味をおびる。

S X 118 (第5図)

B-11区に位置し径 1 m × 0.8 m の楕円形を呈し、覆土は黄褐色を呈し、遺物は出土しなかった。

S X 119 (第5図)

発掘区境に接しており、形状規模等不明であり、深さも 0.1 m 程度で断面の形状も明確ではなかった。

#### (4) 埋設土器

弥生面の調査において、土器が集中している範囲が B-11区とその周辺に認められ、それらのなかに掘方を伴う土器が埋設されていた。相互に時期の巾が認められ、3号のように明らかに十器棺と認められる大型の壺も存在した。従って、これらを含めて埋設土器として扱い記述することとする。

埋設土器No 1 (第13図・図版第23)

B-11区にあり 0.43 m × 0.44 m のほぼ円形の掘方をもち、口縁を南やや下方に傾け西側に 10 m × 20 m 程の角礫を伴い埋設されていた。土器は器高およそ 35 cm 前後の壺であり、弥生後期のものであった。胸部の一部が欠損し、穿孔の有無は確認できない。

2号埋設土器 (第13図・図版第23)

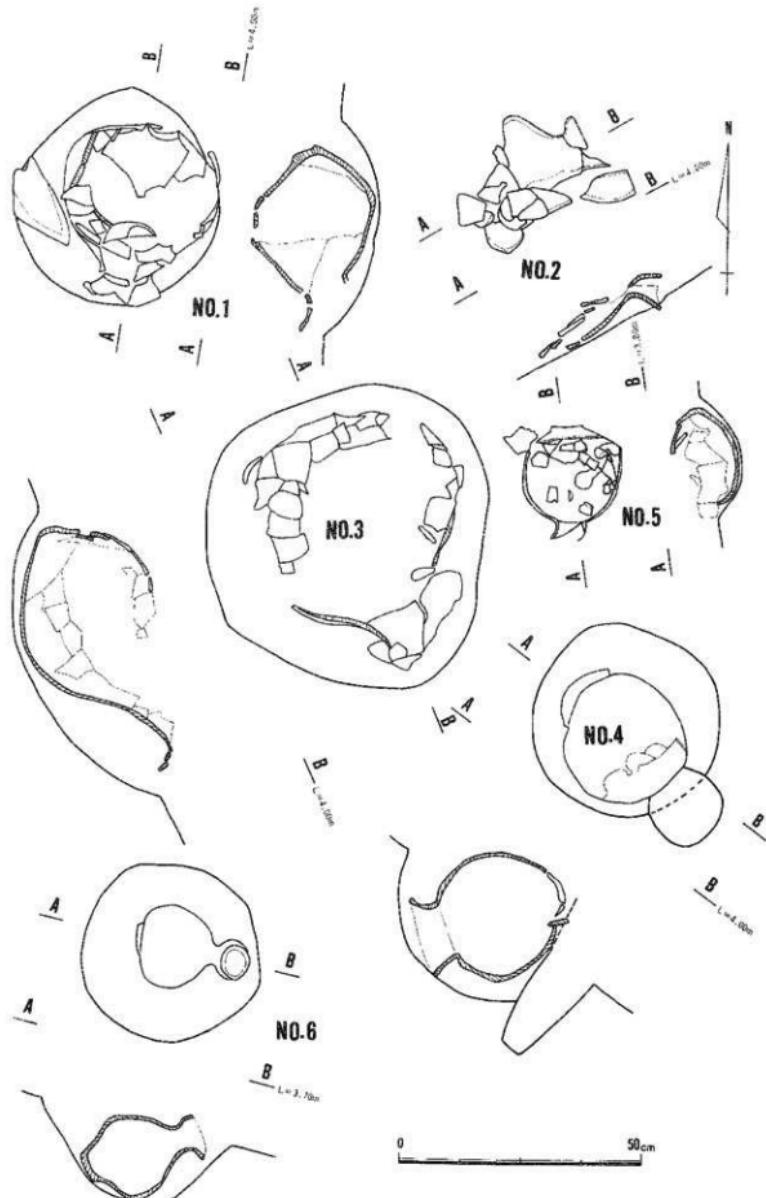
B-11区北東に位置し、口縁部と胸部破片を少量出土したのみで、掘方も消失していたが、それが、3号埋設土器に近い器形を示しているため埋設土器として扱った。1・2・3号ともに、ほぼ直線上に並び、1号とは 5.5 m、3号とは 1.8 m の距離をおく。

3号埋設土器 (第13図・図版第24)

B-11区、発掘区境の手前に位置し、最も埋設の状態が明確なものである。南 1.8 m に 2号があり、その 2号の西にある 4号とは約 3.2 m の距離をおく。

掘方は土器より 5~10 cm 離れて掘り込まれ 0.62 m × 0.6 m の円形を呈し、断面も土器の前にそった形に弧を描く。

埋設土器は口縁部を南にしてやや上向きに埋設された壺で口縁が大きく開き、胸中位に最大径があり、



第12図 埋設土器実測図

器高約50cmの大型のものである。尚、胸部穿孔がみられ、孔が傾め下方を向き埋設されていた。胴肩部に水平と、波状の横描文を施す土器であり、中期後半の時期である。

#### 4号埋設土器（第13図・岡版第25）

B-11区にあり、東に2号がありおよそ1.4mの距離である。南側を中世ビットに切られ、上器、掘方ともに消失する。掘方は0.4mの円形を呈し、断面は弧を描く。口縁部を北に向かって、一方の口縁部が底中央に接する位置まで土器を傾けている。器高約30cm、胴径27cmの壺で口縁部がやや開き、球形状の肩部をもつ、埋設土器のなかでは新しい時期とおもわれる。

#### 5号埋設土器（第13図・岡版第25）

調査X東のB-12区南東端で発見されたもので、南へ口縁部を向け、ほぼ水平に埋設される。掘方は0.23m、上器に接する程度の掘方であった。器高約25cm程の壺である。

#### 6号埋設土器（第13図・岡版第25）

B-12区東端にあり、2号とは2.7m、3号とは2.2mの距離である。掘方は0.35mの円形で、断面はU字形を呈する。口縁部を東に向かって、上向きに埋設され、胸部穿孔を施し、それを下方に向けていた。土器は器高約25cm、口縁部は受け口となり、頸部に水平方向の櫛による連續刺穴文を施し、肩から胴中位にかけて、平行及び波状の横描文を施す。3号と類似する時期とおもわれる。

#### ビット群

弥生～古墳時代初頭期のビットは12基程を数える。中世のビットがこの間にまで及んでおり従ってそれらのビットの覆土とはまったく相違し、かつ、弥生期の遺構の覆土と類似するもののみを当該期のビットと認定した。覆土はやや暗い褐色の砂質土であり、炭化物が含まれるビットも認められたが、ビットの覆土はほぼ類似している。0.25～0.5m程の直径すべて、垂直に掘り込まれる。各々のビットの相互関係は認定できなかった。

図示してはいないが焼土ブロックがB-10区、火をうけた地盤がB-11区に認められたことも付記しておく。

## 第2節 古代末～中世の遺構

最も多くの遺構が検出されている時期である。IV層は当該期の遺物包含層であり発掘区全域に検出されたが特にこのなかで遺物の分布範囲をみると、SD 01からSD 104にかけての西半部に山茶碗の出土が多く、また布目瓦の出土はSD 104以西に限られていた。

この時期の遺構の範囲は以上のことからSD 104以東には広がらず、発掘区内を当該期の遺構の東限として推定した。

この時期の遺構の種類と数は以下のようであった。

溝24本、掘立柱建物跡3棟、土坑4基、井戸4基、ビット群。

#### (1) 溝

当該期の溝は、V層上面から掘り込まれており、SD 11・12・13が約0.1m程下から検出されたが他はほぼ同一面より検出され二年度にわたる調査で24本確認されている。これらの溝の方向をみると弱く「く」の字に屈曲するSD 13を除き、溝の形状規模に關係なく約10°前後の範囲内で、東西南北を示すという共通点が認められる。

この24本の溝は、巾が1m前後の狭いものと、3m～5mを測る巾広の大型の溝との2つのタイプに分類され、前者は、基盤層のV層のブロックを混入し、炭化物を微量含み、後者は青色・灰色の粘土が充填し明らかに常時灌水していたことが推定可能な覆土をなしていた。

以下、前者の巾の狭い溝をA類 (SD 02、SD 03、SD 05～SD 10、SD 12、SD 13、SD 101、

SD 102、SD 105～SD 111) 広い溝をB類SD 01、SD 04、SD 11、SD 103、SD 104、そして各溝の記述をすすめる。

#### 溝 A 類

SD 02 (第14図・図版第7)

B-6区東にあり、南北端をSX 01に切られるが、残存する南端部の東側が中心に向う形状が認められるため、その規模は最大巾0.71m、長さ5m程と推定される。検出面からの深さが0.15mと浅いため断面の形態は明確に判断できないが、U字形を呈すると推定され、底の状態は東に向ってやや高くなることが認められた。中央付近は3つのピットに切られている。覆土は黒褐色を呈し、復土中には約10cm前後の礫と微量の炭化物が混入しており、焼土もみられた。

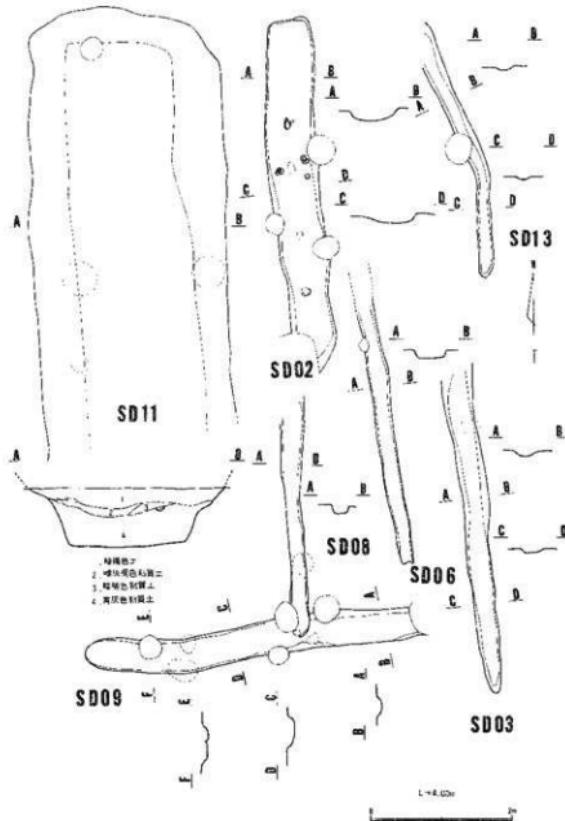
遺物は中央付近の底に接して山茶碗、土器器が出土している。

SD 03 (第14図・

図版第7)

B-8区に位置しこの溝の西側にSD 08・09があり、SD 08と平行し、東側にあるSH 02とした2間×3間の掘立柱建物の短辺とも方向が一致する。最大巾0.42m、検出面からの深さ0.21m、長さ4.5mの計測値を示し、北端は発掘区外に続き、南端は先細りになり消滅している。

断面はU字形を呈し、



第13図 中世溝実測図1

底は平田であった。覆土は、黄褐色土を含む暗褐色土であり混入物も少なく安定した色調を呈する。

S D 05 (第15図・図版第8)

この溝は57・58年度調査区のB-8区～C-9区にわたって検出されたもので、今回調査した溝のなかでは最も長い。

西端はS X 03に切られ、

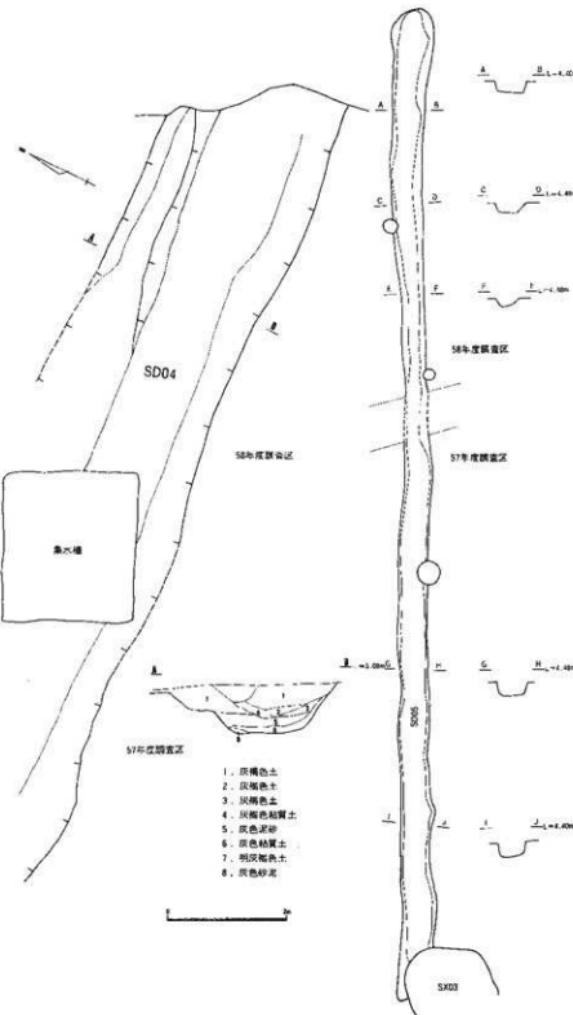
東端はSD 103によって消失しているが、SD 104の東には延びていないことから、全長は23m以内であったと推定される。

残存長16.5m、最大巾0.62m、検出面からの深さは約0.20～0.25m、形状は他のA類の溝と同様に、ほぼ直線をなす掘り方をもち、底は多少の凹凸がみられ、断面は逆V字形を呈する。SH 02とは重複し、方向はSH 02の長辺と一致する。覆土は暗褐色土で上部に移行するに従って、暗い色調となる。炭化物、焼土を含みB-8区の一部では、北側の底から側面にかけて炭化物の集積がみられ東寄りでは底に青灰色粘土ブロックが含まれていたが一部分のみであった。

遺物は西端より約2m付近の底よりほぼ完形の山茶碗が出土し、碟も混入していた。

S D 06 (第14図)

B-9区西端に位置しSD 04に直交して掘り込まれ、SD 07の手前約0.5mが南端となっている。北は発掘区外であり全体の形状は不明であるが直進する溝と推定される。



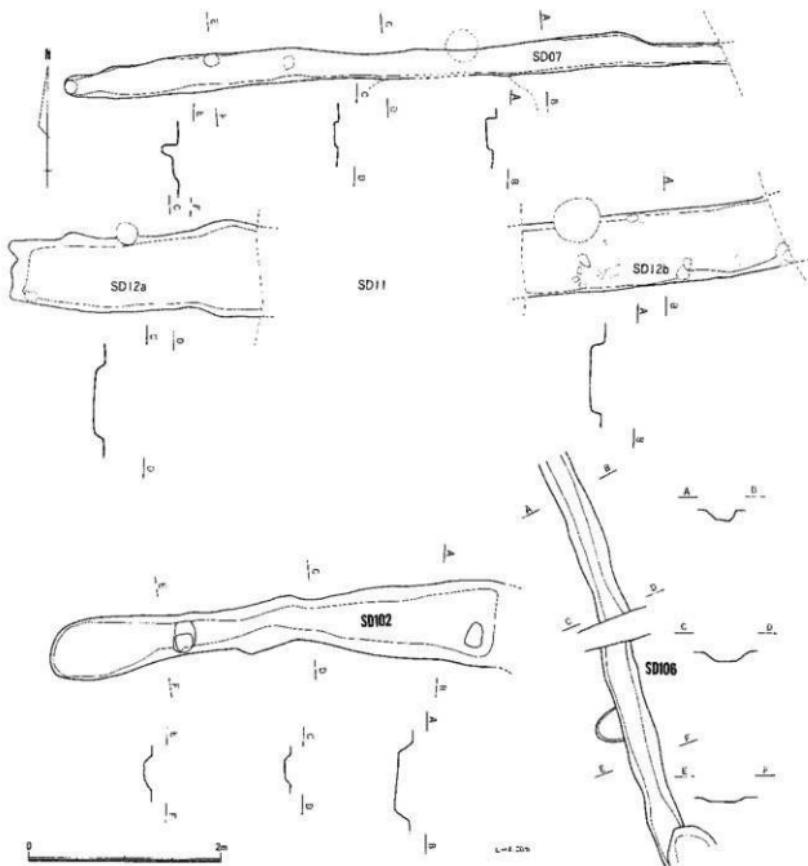
第14図 中世溝実測図2

残存長 4 m、巾 0.32 m、深さ 0.1 m 前後で、覆土は灰褐色味をおびた暗褐色土であったが、灰褐色の色調は直下の SD 04 の覆土の下部が還元された青灰色粘土であり、上部もややその影響が認められる色調を呈していたことから、SD 04 の覆土の影響をうけたものであろう。またこの溝は他の溝よりも約 0.15 m 程下る面からの検出であり、その上面では SD 07、SD 02 と重複していたことも推定可能であった。この SD 06 と同じ面からの検出例としては C・6 区の SD 11 がある。遺物は出土していない。

#### SD 07 (第16図・図版第8)

B-8 区に所在し、SE 01 を切って掘られている。又この溝は SH 01 の北辺に平行し、約 0.7 m 程の間隔をおいている。

東端は排水溝のなかで消失しており確認されなかったが、残存長 6.9 m、最大巾 0.4 m、最少巾 0.25 m



第15図 中世溝実測図 3

であった。検出面からの深さは僅か5cm前後と浅く、断面の形状は観察できなかった。

#### S D 08 (第14図)

S D 09と直立する南北方向の溝で多数のビットに切られる。S D 09との新旧関係はS D 08が新しくS D 09を掘り込み、北は発掘区外に及んでいる。確認された計測値は長さ3.35m、最大巾0.32m、最小巾0.2m。中央部がやや細く両端が広くなる。底は検出面から11cmと浅く、断面はゆるやかなU字形を呈する。この溝の東2.3mには同一方向に走るS D 03があり、この両端と、S D 08の両端は、ほぼS D 09の延長線上の位置となる。覆土は灰褐色で黄褐色ブロックを混入する。

#### S D 10 (第18図)

S D 01の調査後、約0.15m下ったレベルで検出された溝で、S D 01との新旧関係は把握できなかった。西は発掘区外に続いているS D 01に切られる。約2.8mを検出し、巾0.75mを測る。覆土はS D 01と類似しており、出土遺物もすべて覆土中からの出土で、小破片が多い。山茶碗、瓦が出土している。方向は他のA類の溝より東へ傾き巾もやや広く、断面の形状は逆台形を示すS D 01の東側にあるS D 12との形状、規模（巾）の類似性が指摘される。

#### S D 12 (第15図・図版第8)

B-5区からC-6区にかけて検出され中间部をS D 11に切られ、両端をS X 01に切られている。長さは残存長8.1m、巾0.75mを測るが、本来の溝の長さは、S X 01の掘方内で、この溝が終るため10mを越えないものと推定される。A類の溝のなかでもB-7・B-8区付近の溝の巾は約0.4～0.6mであるのに對し、先述したS D 10、S D 02とこの溝はやや巾広くなっている。覆土は炭化物を含む褐色土であり、S D 11の上部覆土に類似していた。この溝はS D 01及び周辺のビット群検出時の面では、確認されず、S D 10と同一の面で検出した。遺物は山茶碗、瓦片が少量覆土中から出土したのみである。

#### S D 13 (第14図)

A類とした溝のなかで、このS D 13は形状、規模、方向が異り、長さ2.8mを計り、逆「く」の字に屈曲し、巾も最大巾で0.28m、A類の溝中で最少の値を示すかつて方向が西へ23°傾いている。

この溝はS D 01の検出時には認められず、S D 10・11・12と同じレベルで検出されたものであり、S D 01の完掘後の調査のため新旧関係は確認できなかった。覆土はやや暗い灰褐色土であり、遺物は出土しなかった。

#### S D 102 (第16図)

S D 101とS D 05の間に検出された溝で東をS D 103に切られている。形状はやや屈曲し、断面はU字形を呈する。長さ4.7m、巾は屈曲部より東でS D 103に近くなるに従い巾広となり0.88m、西では0.55mを示す。S D 07の延長線上にならびS D 05との間隔は4.3mである。遺物は出土していない。

#### S D 105 (第17図・図版第10)

B-11区からは4本のA類の溝が検出された。そのなかで、このS D 105は比較的巾が広い溝でやや全体に湾曲する形状を示す。長さ7.14m、最大巾は両端より約1.6m手前で1.5m、やや膨らんだ部分があり、北側は巾0.95mで両肩ともに平行となる。深さは検出面より約0.15m程であり、断面の形状は明確でなかったが、平坦な底からゆるやかにV字形を呈して立ち上る。

#### S D 106 (第17図・図版第10)

S D 105の東から検出され、それとはば平行に走るのがこの溝であり、S D 08・06と同様、最も巾が狭い溝である。S D 109の延長線上でもあり連続する可能性も推定されるが、ビットに切られており残された僅かな範囲では、その連続は認められなかった。長さ5.5m、巾0.35mを測り覆土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

### S D 107 (第17図)

S D 105・106の南にあり、方向はそれらと直交する。長さ2m、巾0.45m、覆土は黄褐色ブロックを含んだ暗褐色土である。

### S D 108 (第17図)

B 10・11区にあり、東端をピットに切られている。西端の北側に突起部をもつ溝で、残存長2m巾は西に向って広く0.30m～0.55m、突起部で0.9mであった。方向はやや東西方向に近くA類の溝のなかでは特異なものといえる。

### S D 109 (第5図・図版第10)

S D 105と平行し、S D 106の延長上にある溝で北は発掘区外にのびる。南端はピットに切られ、西側は2基のピットを切っている。長さ4.35m、巾0.35m、覆土は暗褐色土であり遺物は覆土中より内耳鏡が出土する。

### S D 110 (第5図)

S X 109・108が滲水する遺構のため還元土の影響をうけ、この溝の西側は検出できなかった。上坑状の遺構とも推定されるが西側には遺構が集中するためこの溝は形状、規模等不明の点が多い。

### S D 111 (第17図)

S D 107の東約1m離れた位置に西端があり東に連続すると推定されたがS X 110・107の周辺の滲水した土壠の還元作用により検出できなかった。残存部0.75m、巾0.35mであった。

### 溝 B 類

B類とした大型の溝はB-C-5区のS D 01、B-C-6区のS D 11、B-8・9区のSD 04、B-C-9・10区のS D 103・104であった。これらの溝は、覆土の下部は青灰色、青色粘土層堆積が認められ、山茶碗、瓦、一部では木製品が出上した。従って、A類の溝との相違として、規模が大型であることと、遺物が堆積した時期には水が溜っていたことの2点が指摘される。また共通点としては、いずれの溝も今回の調査ではその全体を知り得ていないが、およそその方向は東西南北ともにA類の溝の方向と一致することがあげられる。以下個々の溝の記述をすすめる。

### S D 01 (第18図・図版第6・7)

調査区の西端B-C-5区に位置し、V層上面より掘り込まれ、巾5.7m両端はそれぞれ、発掘区外へ続く溝である。南側は搅乱のため土層観察は不可能であったため中央部トレンチと、発掘区北壁において土層観察を行った。その結果この溝は3本の溝が位置を変化させることにより形成されたものであり、調査に際して、新旧関係から、最終の溝をSD 01-1、その東側をSD 01-2、西側をSD 01-3と呼称して調査を行ったが、SD 01-2・3についてはいづれも、SD 01-1に切られており新旧関係は確認できなかった。

SD 01-1の巾は中央部で2.67m、発掘区北壁では4mを測り、北に向って太くなる傾向が認められた。その平面の形状をみると東側掘方の上面から内に約2m、帯状に残存する3.5m程の立ちあがりが認められ、中央より南ではSD 01-2の覆土を切っている。西側も内側へ1.2m～1.7mにより僅か0.18～0.2m程の立ち上りが認められ、南に向うに従ってやや中央となる。このSD 01-1の巾が東の掘方を直線状に連続すると仮定すれば、西の立ち上り部が搅乱で消失する位置で、巾約1.75mとなる。全体に、北に向って広がる形状を示していたものと推定される。底は平坦ではなく、それぞれ約15cm程のレベル差で3段認められた。最も深い範囲は西の立ち上り下部で、標高3.1m、検出面からは0.6mであった。この最深のレベルを北壁土層のSD 01-1掘方上面と比較すると約0.8mの深さを持った溝といえる。このように底の形状は西に低く、東に高いが北側に一段低い一面が認められた。覆土をみると基本的に、下部に暗灰褐色粘土、暗緑色粘土、灰色粘土が形成され、上部は、黄褐色土及びやや灰色味を帯びる黄褐色

上であった。土層の堆積は水平堆積を基調とし、部分的に、凹みや、異った色調を呈する粘土ブロックが認められた。遺物は底に近い粘土中から20cm前後の河原石、館山寺付近の根本山に産する赤色礫と共に、山茶碗、瓦片が出土した。それより上部の黄褐色土中よりの出土も少量認められたが圧倒的に下部からの出土量が多かった。

SD 01-1はSD 01-1により切られるため東側の掘方のみの確認となったが、SD 13が接し、南側、擾乱の手前1.2mで東に曲る状況であった。底は、北から標高3.2mの平坦部から急激に0.6m程落ち込み中央部付近に向って約0.3m程高くなり、南側はそれより0.2m程高く標高3.1mを測る。特に北寄りの断面は東西ともに急角度の立ち上りをもち、底は平坦で逆台形を呈する。南に向うに従って東壁の立ち上りはゆるやかとなる。覆土は、先のSD 01-1と同様の傾向であり、下部に緑色、灰緑色粘土が形成され、上部は黄褐色土を基調とする土層であったが、部分的には、底に接する暗緑色褐色粘土に、黒色有機質のバンドが認められ、上部の黄褐色土中に炭化物ブロックが混入していた。

遺物は中央より北の西側掘方上部に僅かの凹みを伴って、帯状に拳大～20cm前後の礫に伴い山茶碗、瓦の小破片が帶状に出土した。この溝が埋る過程で西壁に集中して投棄されたものと判断した。また南端では底から壁の立ち上りにかけて軒丸瓦、山茶碗が出土した。

SD 01-3は、西の掘方を残し、ゆるやかに立ち上る。底のレベルは中央部が最も低く標高3m、南側で3.4m、北で3.5mであった。断面は北側では壁が直接底に連するが、南ではゆるい段を形成する。覆土は、下部がやや粘質であったが粘土はみられず、上部に50cm×35cmの暗緑色土ブロックが形成されていた。遺物は中央部で帯状にSD 01-2の状態と同様、礫に伴って、山茶碗、瓦が出土し、中央よりやや南の最も低いレベルの底から温美産の大甕片が出土した。

以上のようにこのSD 01は、3本の溝によって構成されており、底の形状も平坦ではなくまた掘方の立ち上りも変化に富んでいるところから掘削による溝で、それぞれの溝が埋没等により機能を果さなくなってしまった段階で再度掘られたものであろう。遺物、礫も、それぞれの溝を掘削した段階の後、短期間に投棄したものであろうと考えられる。

#### SD 04 (第15図・図版第1)

B-8・9区より検出され西は発掘区外へ、東はSD 103によって切られ、SD 101がこの覆土を掘り込んでいる。計測値は巾2.8m長さは14mの東西方向を示す溝である。57年度調査においては発掘区北東端に南の掘方が検出されたのみであったが58年度調査において巾と堆積状況を確認した。

土層観察の結果、この溝は一度堆積した溝の南側の掘り方を跡襲し新たに溝が掘られている状況を示し、古い時期のものが巾2.8m、新しいものが巾2.1mであった。新しい溝の堆積の状況は下部に灰色粘土質土、砂泥が認められ、上部は暗褐色を基調とした灰色味を帯びる粘質土であった。掘り込まれる溝の覆土は下部に灰色泥砂が認められ有機質分が多く、木片も含む。上部は暗褐色土で色調の暗い粘質土であった。

遺物は古の溝と新の溝両者間で時期を比較するものは出土しなかったが、新の溝から土師質の小皿、陶質の小型碗が出土した。

#### SD 11 (第14図)

SD 11はB・C-6区、SD 01の東3mの位置でそれとはほぼ平行して検出され、SD 12に直交して掘り込み、南は発掘区外へ続く。巾2m、深さ0.8m、長さは約6mを調査した。平面の形状は北東隅が丸味をおびる長方形形状で、底も同様な形状を示す。断面は東壁にやや傾斜のゆるい段がみられるのを除き、ゆるやかに底から壁に立ち上るコの字状を呈する。覆土は、下部が青灰色粘土層が0.4m程堆積し最下部は青色味が消えかなり滲水していたとおもわれる。上部は暗褐色土であり炭化物、河原石、赤色角礫が混入する。特にII層中からは、それらの礫に伴って、平瓦、丸瓦、軒平瓦、山茶碗、甕、陶器片が

出土したが、その出土状態は、II層中のやや青味をおびる粘質土約0.1mの間に散在する状況で投棄されたものと判断された。また、この出土量と比較して、底部からは極く少く、軒平瓦と長さ1.23mの板状木片および、種子、木の葉といった自然遺物を出土する。この溝は、掘削時から約0.4m程埋没後多量の山茶碗と礫及び少量の瓦が投棄され埋没したものと推定される。

又東壁がやや段状に遺存することから最初の溝を拡張したとも判断されるが上層の観察では確認できなかった。礫はいづれも、SD01で発見されたものと同じ種類のものであった。B類の溝中、端部の形状を知り得たのはこの溝のみであった。

#### S D 104 (第19図、図版第9)

S D 103と平行し南北方向に走る溝で、巾1.8m、南北端とともに発掘区外へのびる。形状は東掘方上面はほぼ直線となり西側では南北で弧状となる。断面の形状は底から壁が、鋭く立ち上り、北半部において、壁にゆるやかな股が認められる。覆土は、下部が灰色を基調とした粘質土で緑色粘土ブロックも認められた。上部は還元が及ばず黄褐色の堆積であり、炭化物、木片等の混入物は認められなかった。遺物は、底付近から粘土層中にかけて、高台が低く体部のやや張る形状をもつ山茶碗等、約10点が出土した。B類の溝のなかでは最も巾が狭く、西側はS D 103により切られている。

### (2) 土坑

七坑は、4基が検出され、散在的に分布しかつ出土遺物も少く、その機能、性格に言及可能なものはなかった。近世十坑も同じ面に検出されるため時期の判断は遺物を出土しないものと、弥生面に掘削が及び、かつ弥生土器を出土する土坑については、近世土坑との復上の比較を行い、時期を推定した。期の土坑の覆土は溝ビットにみられるやや暗い黄褐色砂質土を基調にしており、一部に粘性の強いものもみられた。これに対し近世則は帶水性が強く有機質の暗褐色土か、青灰色の還元土であった。

#### S X 02 (第5図)

C-8区に位置し、SE02が約0.75mをへだてて掘り込まれる。一辺1.37mの隅丸方形を呈し、底がやや凹み、壁はゆるやかに立ち上る。覆土はSE02上面と類似した褐色土で、遺物は出土しない。

#### S X 03 (第5図)

SX02の西約8m、B-8区から発見されSD05の西端を切る。辺1.58mで南北がやや長い円形を呈する。断面は底からゆるやかに立ち上るU字形であり底にかなりの凹みがみられる。覆土は黒褐色土であり、山茶碗、陶器片、土鍤が出土した。

#### S X 104 (第20図)

S D 105の南にあり、一辺が直線的に長い不整形を呈する長い辺は1.3mで、断面掘鉢形を呈する。覆土は黄褐色砂質土であり、遺物は施釉陶器片、土鍤質小皿が出土した。

### (3) 挖立柱建物跡

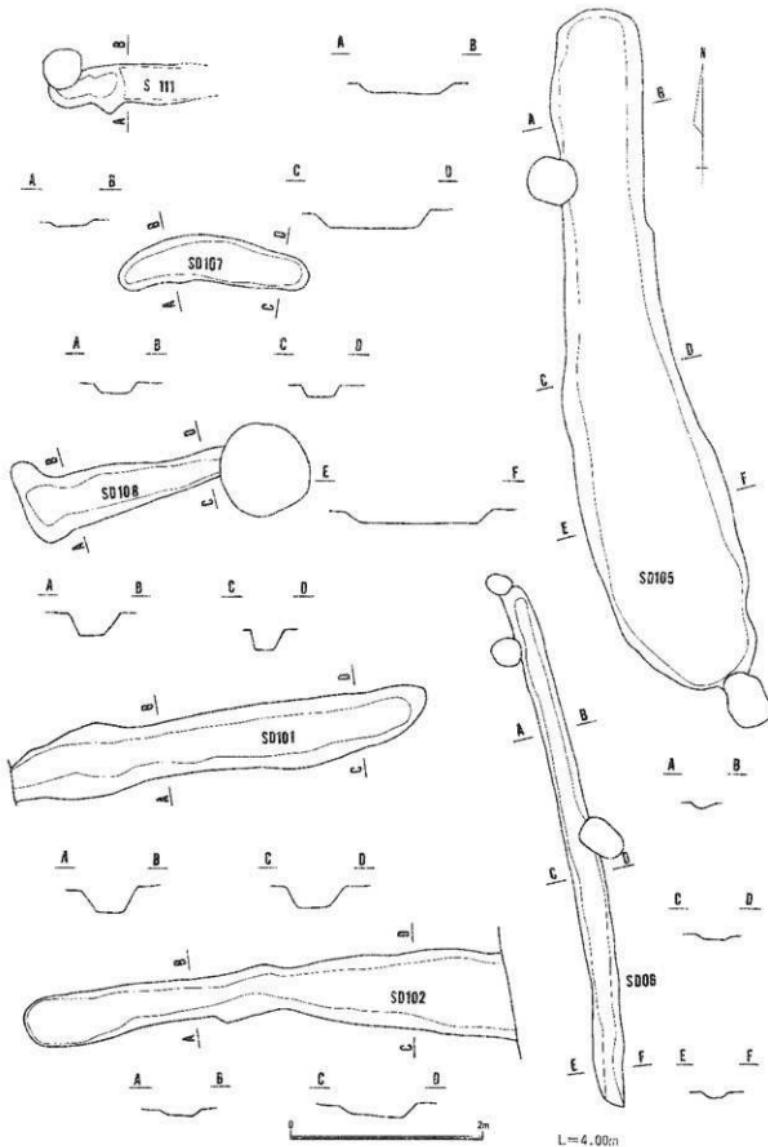
掘立柱建物は3棟が確認された。V層上面では中近世の遺構が検出された結果、そのなかに多数のビット群が含まれており、主としてその配置を重点に現場での検討を行った。覆土は、遺構に類似した暗黄褐色砂質土を基調にしたが、そのなかに、青灰色粘性土、黄色ブロック、焼土、炭化物等が混入していた。各ビットは一列に並ぶものが数ヶ所で確認されたが、その対をなすビットを認定できなかった。

発見された3棟の共通点は総柱であること、各辺の方向がほぼ一致し南北軸はやや西に傾くことの2点があげられる。

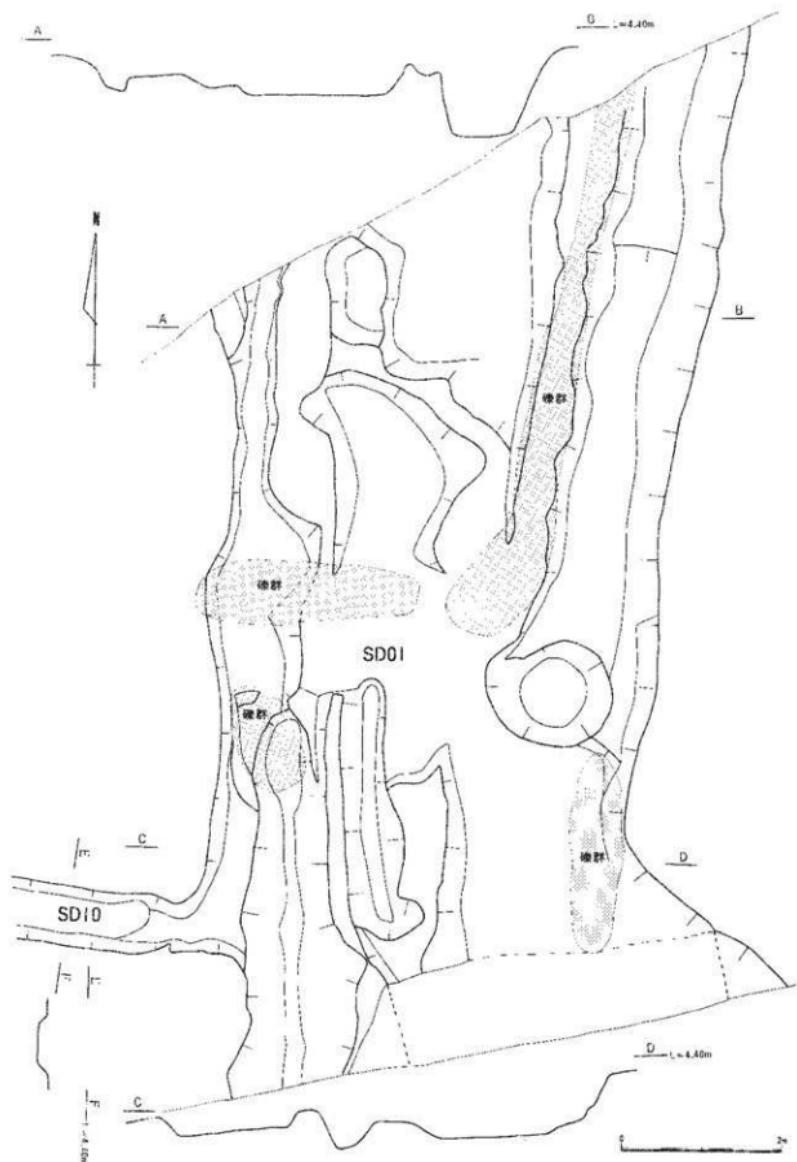
#### S H 01 (第21図・図版第12)

B-C-7区に位置し、3間×2間で長辺は南北方向を示す。SH02とは約2.5m離れSH03とは南北コナーが重複する。

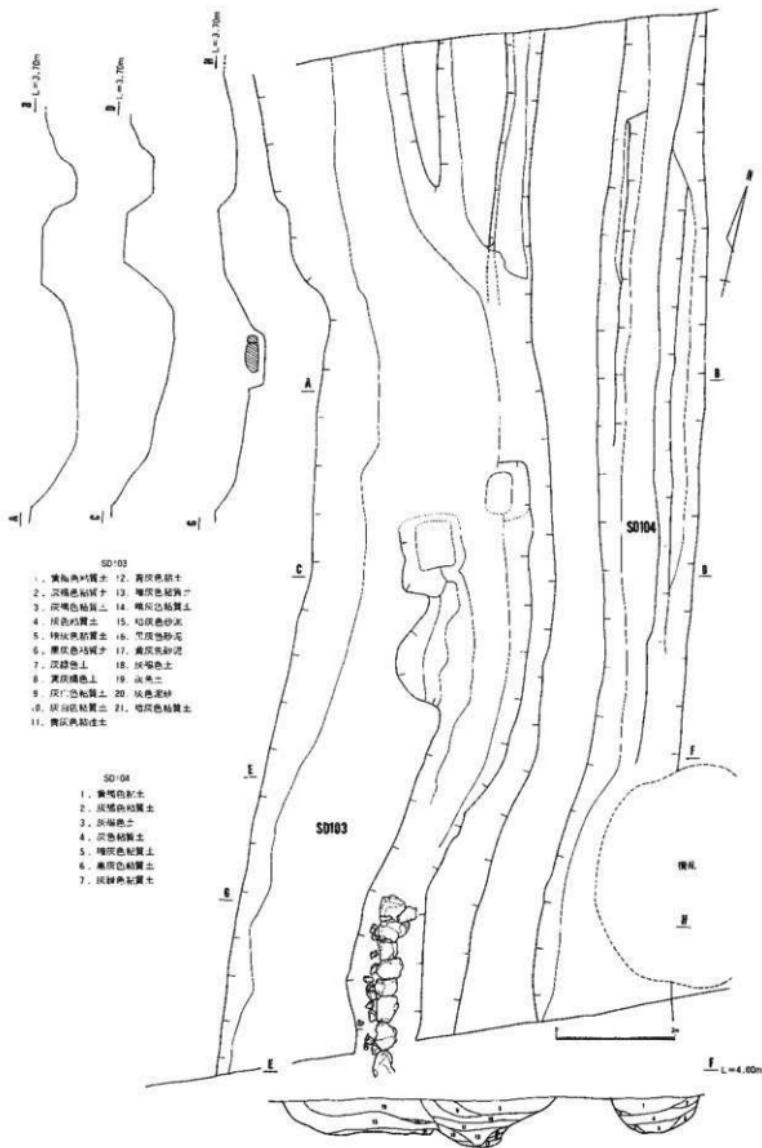
規模は南北5.7m、東西4.1mであり柱間は北南辺で2m強、東西辺で約1.8m、を計測するが、西辺



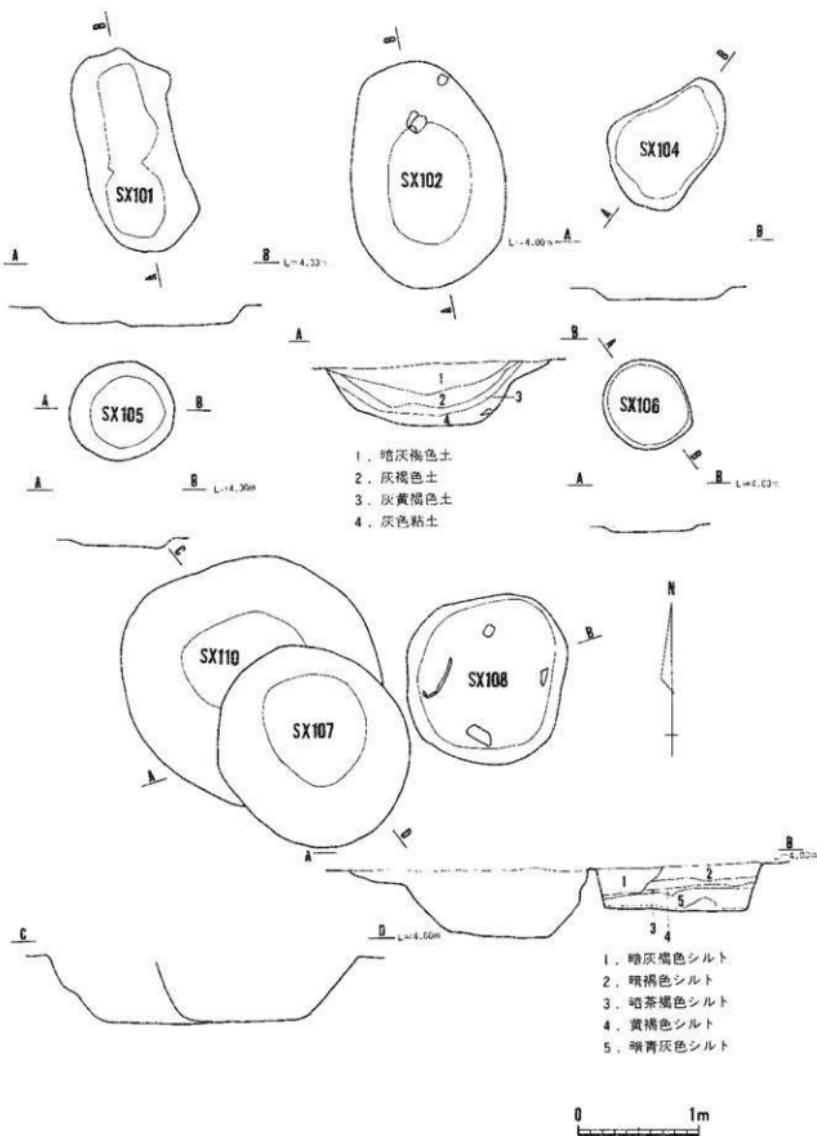
第16図 中世溝実測図 4



第17図 中世溝実測図 5



第18図 中世溝実測図 6



第19図 中世土坑実測図

と東辺の中央の柱間が、 $2.1\text{ m}$ と他より $0.3\text{ m}$ 程長くなる。ピットの形状は直径約 $0.4\text{ m}$ の円形で、垂直に約 $0.3\sim0.4\text{ m}$ 掘り込まれていた。礎石、礎板は発見されなかったが、各々のピットにおいて柱痕を確認した。間口1を東に向かた建物跡と推定される。

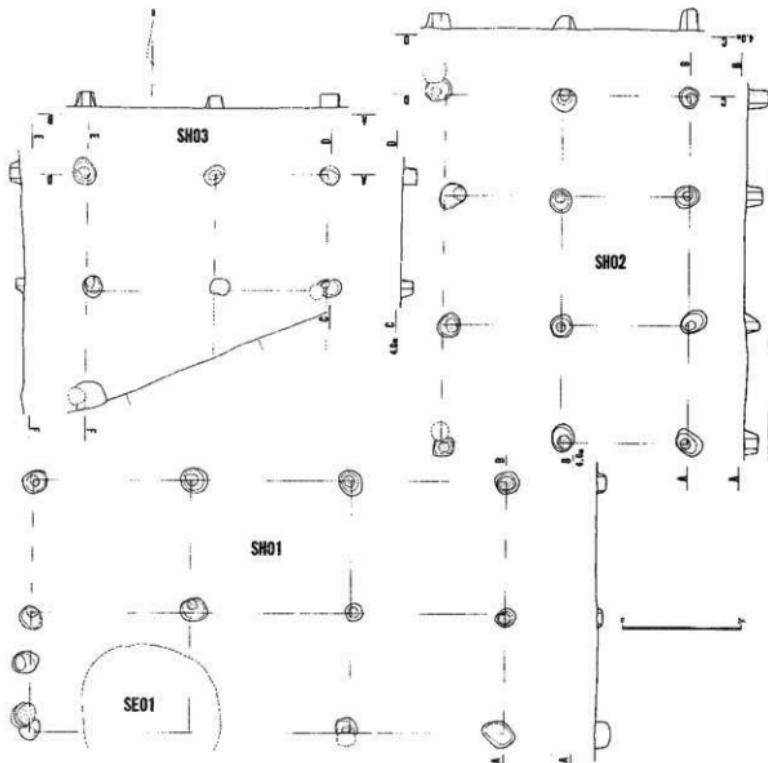
S H 02 (第21図・図版第12)

2間×3間の建物で柱間は、長辺が約 $2.6\text{ m}$ 前後、短辺では、北側の柱間が、 $1.8\text{ m}$ 前後、南側が $2.25\text{ m}$ で約 $0.4\sim0.5\text{ m}$ の差がみられた。長辺全長 $5.68\text{ m}$ 、短辺 $4\text{ m}$ である。

SH01の東辺を延長すると、このSH02の西辺にあたり、間隔も $2.5\text{ m}$ あり方向も長辺が直交する形になり相互の関連が指摘できる。北辺でSE01に削られている。

S H 03 (第21図・図版第12)

SH01と一部重複して検出され、北辺のみ全長が確認され $4\text{ m}$ を計り、西辺、東の一部を構成する2個のピットが検出されたのみで、半分以上は発掘区外である。規模及び柱間もほぼSH01と同様とおもわれる。



第20図 挖立柱建物跡実測図

掘立柱建物跡を構成するピット以外に、柱根をもつもの7基、根固めの縁を伴うもの2基、側面板をもつもの1基、柱の下に山茶碗を入れているもの1基が発見されており、全体のピット数約3%は柱痕が検出されたが、柱の抜き取り痕等は検出されなかった。

#### (4) 井 戸

井戸跡は、4基検出され、それぞれ検出面より2~3m下の青灰色砂層を掘り込んで水溜部が構築されていた。また各々の井戸からは、山茶碗が多く出土し、そのなかに、墨書き器が多くみられた。

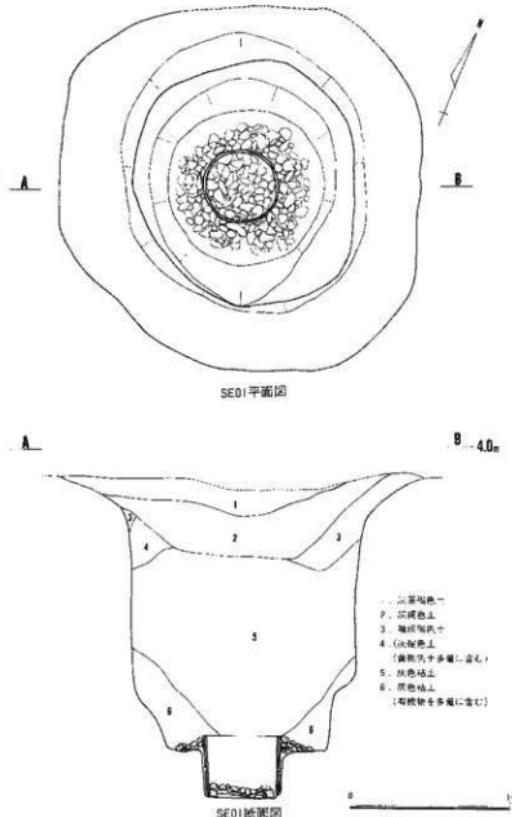
S E 01 (第22図・図版第19)

B-8区に位置し、SD07に切られ、SH02の柱穴を掘り込む。水溜部に曲物を置き内外に5~10cmの円環を敷いた他に施設をもたない素掘りの井戸である。掘り方は径2.3mの円形に近い形を示し、ゆるやかに落ち込み0.7m付近で垂直に掘り込まれる。水溜部の半面形状は東側で直線状を呈するが他は椭円形に掘られる。長辺1.42m。

短辺1.17mであった。曲物は、径50cm、高さ40cm、厚さ5mm程の一枚板を用い、周間に3段にわたって細長い板で補強するものでこの内側に礫を敷き、外側の礫は曲物に向って高くなるように敷いている。曲物の底は青灰色砂層であり、現在でも湧水し、その面の標高は1.7mであった。

覆土は検出面から0.7mまでが褐色土であり部分的に灰色の色調を示す。下は曲物に達するまで灰色粘土であり、有機質分を多く含み、遺物の他に植物の茎、小枝、木片等が出土し曲物の上面より10cm程上では植物の纖維、小枝が厚さ10cm、巾50cmにわたって認められた。

遺物の多くは下層の灰色粘土層より出土し山茶碗、布目瓦、木製品として、下駄、漆器碗、切り込みの入る道具の柄、他に、草食動物の歯とおもわれるものが1点と淡水産の2枚貝が出土したが、井戸の底付近からは、曲物の中から漆器碗片が発見されたのみで、曲物底及び縁の周囲からの遺物の出土はなかった。遺物の数は土器類が約30点、木製品5点、布目瓦4点が出土した。



第21図 S E 01 実測図

調査を行った4基の井戸のなかで最も単純な構造をもち、井戸壁を保護する施設をもたないのはこのSE01のみである。

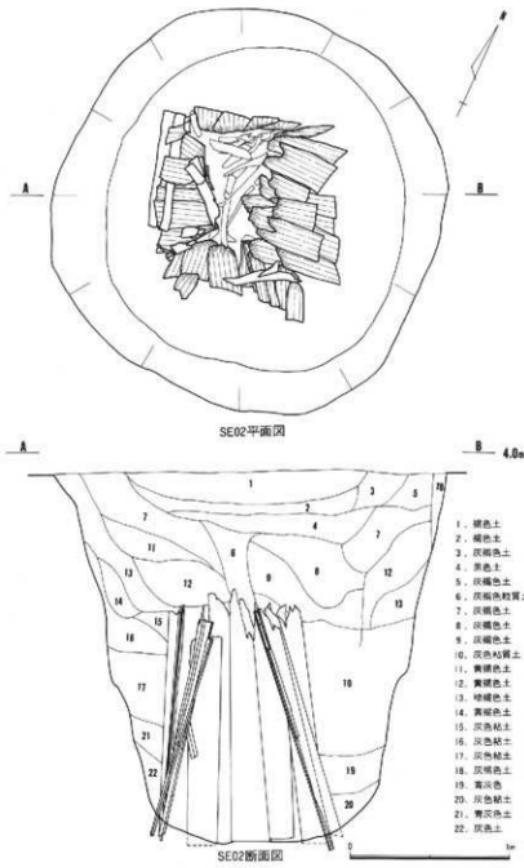
#### SE 02 (第23図・図版第19)

SE01の南4.2m C-8区北東端に位置する。井戸壁を保護する部材が、四方から押し潰された状態で検出され井戸内での調査が不能であり、従って施設の構造を把握したうえで、平面図を作成し、半蔵を行って調査した。

掘方は、直径2.6mの円形で、断面はほぼ垂直に2m立ち上る。井戸枠底面で、直径2.05mの円形であった。

井戸の施設は掘方内のやや北西に寄った位置で、水溜部に曲物等の施設を設けず、井戸枠の底面に径5cm程の円礫を敷いて水溜部としている。この礫層は井戸掘方底面まで約50cmにわたっており、中間に厚さ18cmの礫層(径1~2cm)を挟んでいる。井戸側の壁は基部で東西1.1m、南北1.3mの方形で巾15~20cm、長さ100cm~150cm、厚さ5mm前後の板材を縦位に組み合せ、接合部には外側に巾50~60cmの板材を用いて、土の流入を防止している。一辺に用いられる板材は東壁の例でみると内側に6枚外側に3枚が確認された。外側の板材は断面図でみると長さ60cm、基部の位置は内側の板の下面より75cm上、水溜部上面より35cm上であった。このことからも、井戸壁の補強よりむしろ、内側の接合部からの土の流入を防止する当て板として機能していたと判断した。用材は割材をそのまま用いており僅かに接地面を平坦に仕上げている程度であった。内側の板は基盤層に10cm程打ち込まれている。

井戸壁を支える木枠の構造については、残存状況をみると、原位置を保つと判断される木枠ではなく、すべて内側に崩壊しており、木枠と判断される巾3cmの角材も多量に出土したが、切り



第22図 SE 02 実測図

込みのあるもの、先端を尖らせたもの、井戸壁の一辺に相当する長さの横木等がみられるが、四隅の柱は抜き取られておりその構造は不明である。井戸底の礫の上面は標高約2mであった。

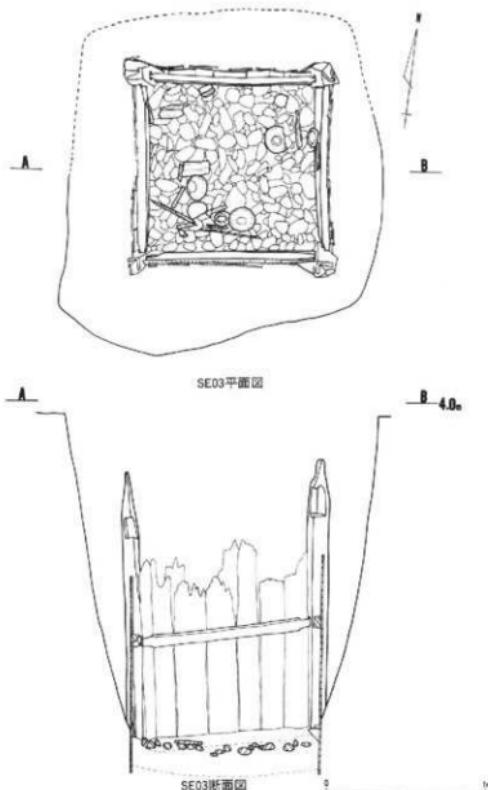
土層は検出面より約1mまでが褐色土を基調とする砂質土であり、灰色、黄褐色、黒色の堆積が認められた。2mから下は粘土層となり、灰、黒色の粘土が厚く堆積する。特に黒色粘土層からは多量の木枝、葉等が混入していた。この土層で粘土層上の約1mの褐色土は、煩雑な様相を示しており水平堆積を示す線と斜行するもの、急傾斜を示すもの等がある。このなかで、掘方西壁より20cm、東壁より30cmの位置に先にあげた急傾斜で落ち込む線が認められるが、その内側において、ゆるやかな傾斜がみられ東側では不規則な線が認められ、上面中央部には長さ1.5m、厚さ0.4mのなかにレンズ状の堆積が認められる。このことから急傾斜に落ち込む線は、井戸の崩壊によって生じたもので、ややゆるやかな線は崩壊に伴う凹みを埋戻した結果生じ、レンズ状の堆積は、埋戻し後の凹み内への自然堆積によって生じたという所見を得た。また井戸枠の

板材は掘方の中間付近に達するのみで、崩壊後、上部を取り去ったものと推定されることも考慮すると、土層の所見とも合致する。出土遺物は、大部分が粘土層中の出土で、僅かであるが井戸の底に堆積した礫の上から山茶碗が出土地している。また山茶碗の完形品が西南コーナーの井戸壁と井戸の掘り方の間から出土した。出土した遺物は次のようにあった。山茶碗、布目瓦、漆器椀、曲物用と推定される樹皮、板材、棒材等で、井戸の部材と判断した本製品を除き約30点程である。

S E 03 (第24図・図版第20・21)  
C-6区、発掘区境から南壁土層検討のため壁面を削ったところ、井戸の北壁の板材が発見されたもので、発掘区を南に拡張し調査を行った。  
S D 11の東6m、S H 02の西8m付近に位置している。掘方は、一辺1.9mの方形で下端は、井戸側の壁の板材の位置となり一辺1.25m程度ほぼ垂直に2m掘られている。

井戸の構造は内側の寸法で120cmの継板組隅横材どめのタイプであり底はS E 02と同じ形態で、径5~10cmの円礫を厚さ20cmにわたって敷いているが、S E 02のように中間

に大きさの異なる礫を敷きつめてはいない。井戸側をみると壁の板材は、巾10~20cm、残存長1.2~1.4m



第23図 S E 03 実測図

厚さ1cmを用い、割材で先端は平坦に加工する。板材は内・外と二重に組み合せ、縦に8枚～10枚内側を組み、その接合部に外側の板の中心を置いている。四隅の柱は一辺約10cmの角材であり、長さは1.7m残存していた。枘穴は一辺約4.5cmで、約70cm間隔に3ヶ所あけられるが上部の枘穴は一辺約20cmと大きなものであった。

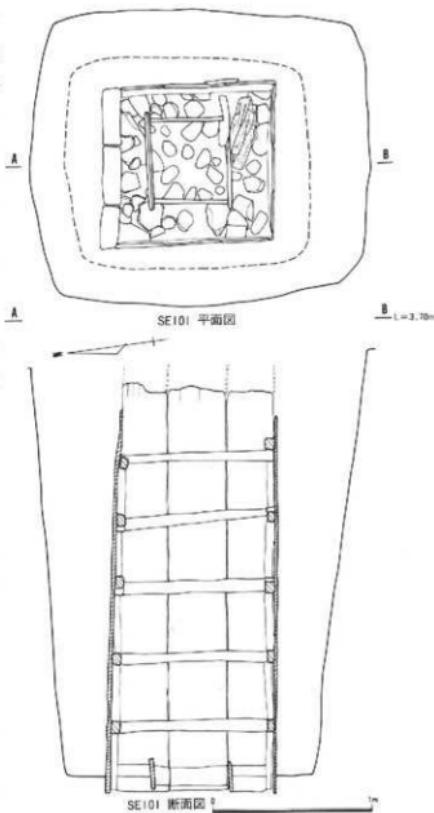
覆土は検出面より約0.8m付近までが褐色土でそれ以下は斜行堆積を示し植物遺体を多く含む黒灰色粘土であった。

遺物は底の礫面にはほぼ完形の山茶碗3、同底部5、木片が出土し、山茶碗のうち1点は墨書き器であった。山茶碗は41個体以上出土し、布目瓦、木製品として建築材、箸、工具の柄と推定されるもの、下駄、竹製の籠の断片が出土した。墨書き器は11点発見された。

#### S E 101 (第25図・図版第22)

C-10区、S D 104の東5mの位置にあり、掘方の約1/2程を拡張して調査した。掘方は東・西辺が1.9m、南・北辺で1.7m、東辺がやや膨みをもち約0.2m程張り出している。ほぼ垂直に掘られ下端では1.55mであった。東西方向の巾は井戸枠除去時の土の崩壊により計測できなかった。

井戸の構造は、継板組横桟どめであり、横木を一段ごと支柱で支えている。板は、長さ2.1m遺存しており、巾30～37cm、厚さ3cm。井戸内面と板の接合部はなめらかに面取りされ工具痕を残さないが外に向く面には割材の凸凹を手斧状の工具で削り取った痕跡が明瞭に残されている。壁材を支える枠は五段検出され、35cm、30cmの間隔で交互に組まれ横木は5cm×7cmの角材で、直角に組む部分は柄と枘穴があけられている。支柱は4cm～5cmの角材で横木を支える一本の棒であり、組み合わせのための枘と枘穴がみられる。底には、長さ62cm、巾19cm、厚さ2cmの板2枚と、長さ50cm、巾19cm、厚さ2cmの板2枚が、枘と枘穴で長方形に組み合わされ、内寸で50cmの正方形の水溜部を構成していた。この部分はS E 03と同様に水溜部の木枠の内外に厚さ7cm～10cmに約1～2cmの円礫を敷いていた。尚井戸はこの水溜が埋った後にも使用しており、枠の直上の位置から10cm～20cm大の円礫と角礫が散在し、遺物が出土した。この木枠内には、まったく遺物を含まない。この底の標高は0.8mと3基中最も低い。覆土は0.6～0.7mまでは茶褐色土でありその下は粘土層で灰色粘土層が基となる。層の堆積は中央がやや垂むが自然堆積によるものとおもわれ、帶状に



第24図 S E 101 実測図

有機質分が多く、植物遺体がみられ、また遺物は帶状に出土し、その間にはあまり出土せず底に至るまで計7面の遺物の残る面を確認した。底の遺物は南西コーナーに寄って木片、東寄りに布目瓦、北東コ-

ナーから北壁にそって、大甕片、山茶碗が出上り、山茶碗は8点を数えた。

遺物は、全体で山茶碗82個（底部の数）その他に人鉢、大甕、陶磁器、木製品としては箸が出上り、また4基の井戸の中では最も遺物の出土量が多く、山茶碗82個中、明確に墨書き土器と認められるのが約30%を占める。

### 第3節 中世末～近世初期の遺構

遺構は、調査区の全域に分布し、散在している状況である。遺構の種類と数は以下のようであった。  
溝5本、上坑状遺構10基、桶埋設遺構2基。

#### (1) 溝

##### S D 101 (第17図・図版第9)

B-9区、SD 04 のなかに掘り込まれた溝であり、西を集水構設置の際に消失する。残存長4.4m、巾0.8m～0.6mで覆土は暗褐色、断面はU字形を呈している。方向は中世A類とした溝とほぼ同じN-80°Eを示す。この溝の覆土中には、埋没する過程で混入したとおもわれる柱穴の円錐が散在し、陶器片も伴っていた。なお、東端の底から甕が出上っている。

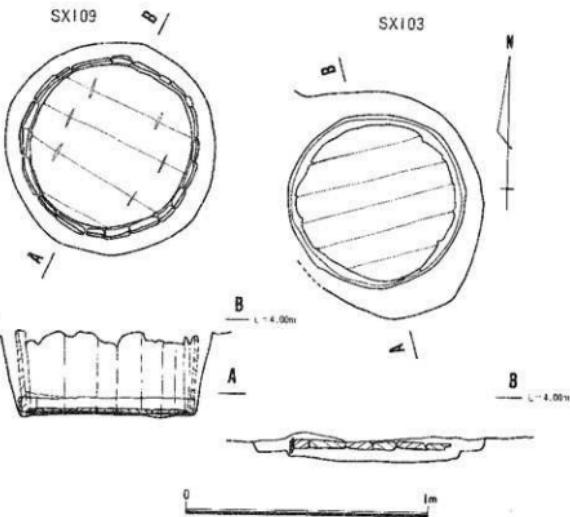
##### S D 102 (第17図)

B-9区から発見され、SD 101とSD 05との間に位置する。ほぼそれからと平行し、東をSD 103に切られている。長さ4.7m、巾0.5m～0.9mで、中央部でくびれ東に向って巾広となる。東端に約24cm程の角礫を伴う。土層は暗黄褐色であり、混入物を含まず染付の磁器片を出土している。

##### S D 103 (第19図・図版第9)

SD 104と平行して南北方向に走る溝でありSD 04を切っている。検出された巾は発掘区南壁より中央部付近で約4m、

北壁手前で4.7mとや  
や広くなる。また北側  
の東側掘方内に溝状の  
落ち込みが認められ底  
の平面プランで確認し  
た。底の形状は一様で  
なく中央部付近に格円  
形の落ち込みがみられ、  
その位置から南側の西  
はゆるやかな面となり、  
東は「コ」の字状に0.2  
m程深い溝になる。こ  
の底の形状は上層図で  
確認されるように、古  
い段階に西の低い段に  
溝が形成され、後にこ  
の溝を切って東側の深  
い溝をもち、南端に石  
組みを作った溝が掘られた。この相互の溝の痕跡は南半で顕著であり、北半は一本にまとまっており、平



第25図 SX 103・SX 109 実測図

面での溝のプランは認められなかったが、いづれも同一方向に走る巾 $2.5\text{ m}$ 程の溝であったと推定される。尚、北側東端の溝状の落ち込みの痕跡はその覆土上に近世初期の陶磁器を含み、遺物が帶状に出上したが、平面では確認できなかった。このようにこの溝は、古い溝を切って再度東側に溝が掘られたことにより形成されたものと判断された。また発掘区南端の土層をみるとこのSD 103は中世包含層であるIV層から掘り込んでおり、東のSD 104とは明確な時期差をもつ溝であることが確認された。

遺物は、下部の青灰色粘土層及び灰色砂泥から皿、染付の茶碗、初山窯で用いられたと思われる箱等、近世初期を示す遺物が出土した。尚、石組み造構は下部の灰色粘土の上面に敷かれ、長さ約 $3\text{ m}$ にわたり、 $30\sim40\text{ cm}$ の角礫の上面を平坦にそろえ、西側に小礫をあてがっている。この石組みは、掘り方に全体がはまり込んでしまう状況で置かれ、又、石の下面から底まで約 $0.1\text{ m}$ 程であるため、暗渠造構とも推定したが、溝内を歩くための石敷であろうと判断した。

#### SD 112 (第27図・図版第10)

発掘区の東隅B-13区から発見され、東隣りのSD 113と平行に、南北方向に走る。長さは $6.4\text{ m}$ が検出され、巾は北半で約 $1\text{ m}$ 、南に向って広くなり $2\text{ m}$ 程となる。この溝は北端の掘り方内に $5\sim10\text{ cm}$ の礫を伴う溝であり、河原石、角礫等が底までの間 $0.2\text{ m}$ にわたって散在していた。遺物は、陶磁器の小破片を出土する。

#### SD 113 (第27図・図版第10)

SD 112を切る溝で、東側の立ち上がりを確認したのみで、巾は明確でない。ほぼSD 112と平行し遺物は出土しない。暗褐色を呈する覆土をもち暗褐色の有機質上がみられた。大部分が発掘区外であり調査区のなかでも大規模な近世の溝はSD 112・113の2本のみである。この位置から道をへだてた善明寺境内の間は56年の試掘の際、沼状の低湿地と報告されており、この地形を反映した溝の可能性も大きい。

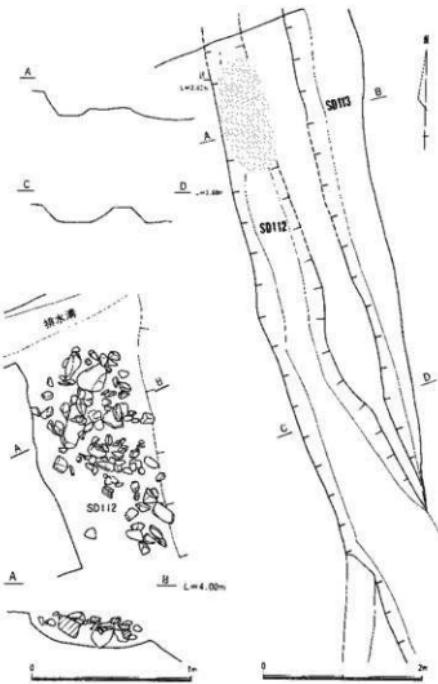
#### (2) 土 坑

##### S X 01 (第5図)

B・C-6区に存し、SD 02、SD 12を切っている。 $2\text{ m} \times 3.5\text{ m}$ の長方形で北西の隅が弧を描く。深さは $0.7\text{ m}$ を測り、断面はU字状を呈する。覆土は暗青緑色粘土であり、底及び覆土中から多量の遺物を出土した。灯明皿、陶器片、花立、瓦把手付フタがみられ、寛永通宝が出土した。覆土中には木片、竹、小枝、杉皮等の植物遺体も多量に含まれている。

##### S X 04 (第5図)

SX 06と近接し直径 $1\text{ m}$ 、断面はU



第26図 SD 112・SD 113 実測図

字形を呈し、下部に青灰色粘土がみられる。遺物は施釉陶器、土師質小皿、甕、砾石が出土した。

S X 106 (第5図)

S X 04 の北に近接し  $1.95\text{m} \times 1.4\text{m}$  の隅丸長方形の断面摺鉢形を呈する。上部が暗褐色粘土、下部は黄灰色粘土であり、植物遺体のブロックが認められ、遺物は、天目茶碗、小皿、甕が出土する。

S X 101 (第20図)

B - 9 区 S D 12 の  $1.4\text{m}$  南にあり、 $1.94\text{m} \times 0.9\text{m}$  の細長い不整形の土坑である。全体が青灰色土であり、礫が混入する。御深井釉の碗が出土する。

S X 102 (第20図)

S X 101 の東に位置し、 $2.08\text{m} \times 1.45\text{m}$  の楕円形を呈し、上部は褐色上で炭化物を多量に含み、下部は灰色粘土であった。遺物は施釉陶器が出土し、中世、弥生土器も混入する。

S X 105 (第20図)

S X 104 の東約  $3.3\text{m}$  にあり周囲のピットを切る。径  $1\text{m}$  の円形土坑である。断面はゆるやかに底から立ち上る壁をもち、覆土は S X 104 とは似似似し、黄褐色土であった。大口茶碗、小皿等、施釉陶器を出土する。

S X 106 (第20図)

発掘区の東端に位置し、 $0.8\text{m}$  の円形土坑である。青色粘土が復土であり、磁器の碗が出土する。

S X 107 (第20図)

S X 107 ~ 110 が付近に集中してみられ、覆土は青色粘土層で、かなり還元がすんでいる。施釉陶器、湯呑、ぐい呑み、摺鉢が出土する。

S X 108 (第20図)

S X 107 と S X 109 の間にあり、 $1.5\text{m}$  の円形土坑である。青色粘土中に蒸瓦片が含まれていた。

S X 110 (第20図)

S X 107 に切られているが直径  $2.5\text{m}$  の円形土坑である。青灰色粘土中に、施釉陶器片、蒸瓦片が出土する。

### (3) 桶埋設遺構

S X 103 (第26図・図版第17)

C - 9 区にある桶を埋設した遺構で底部のみ出土し、側面の板材は発見されなかった。掘方は  $0.96\text{m}$  の円形であるが西は排水溝のため消失する。桶の大きさは側面の痕跡から直徑  $70\text{cm}$  で  $7\sim15\text{cm}$  外側で掘り方の下端となる。底板は  $10\text{cm}\sim12\text{cm}$  厚で、厚さ  $3\text{cm}$ 、板は両端より  $5\sim7\text{cm}$  内側に長さ  $3\text{cm}$  程の竹釘を用いて組み合わせる。

S X 109 (第26図・図版第17)

C - 12 区、S X 107・108・110 といった覆土中に還元のすすんだ青灰色粘土を含む、土坑の東に近接している。桶は直徑  $75\text{cm}$ 、側板は高さ  $30\text{cm}$  程で 23 枚が遺存していた。底板は、巾  $7\sim10\text{cm}$ 、厚さ  $3\text{cm}$  で 5 枚使用し、相互の板間では  $7\text{cm}$  間の竹釘を用いて接合し、巾  $6\text{cm}$  の竹のタガがはめられていた。掘方は径  $0.88\text{m}$  の円形で桶との間は  $5\sim6\text{cm}$  であった。覆土は黄灰色粘土下底に接して厚さ  $2\text{cm}$  の暗灰褐色の細砂が認められる。遺物は陶器片が出土したのみであった。座棺と推定される遺構である。

## 第Ⅳ章 まとめ

二ヶ年にわたる調査の結果、弥生時代には土器棺及び方形周溝墓をともなう墓域が形成され、古代末～中世には大溝で区画されたなかに掘立柱建物と井戸を確認した。遺物の検討を経ていない段階であるが調査中の所見を中心として、二、三の問題点をまとめてみたい。

### ・各時代の遺跡の範囲について

弥生時代～古墳時代初頭期

西は遺構の西限B C—7区付近とおもわれ東は調査区内の東端である。昭和56年度の確認調査において善明寺と今回調査区の間は湿地帯との報告がされており從って遺構の東限を今回調査区の東端と推定した。

南北の範囲は現地形の観察からの推定となるが、調査地点をほぼ中央にして南北に細長い自然堤防の範囲に遺跡が立地するものと考えられる。それは現在人家が分布し、南半は都田川改修時に掘削され南端部が残されている。南北250m、東西50mを測る。そして、第2図でみると、水田が最も南に深く入り込む付近が西限でB C—7区付近といえる。従って、弥生時代の遺跡はくびれ部から東の先述した自然堤防に立地することが現地形のうえからも認められる。

古代末～中世

調査において確認した範囲は東端の部分であり大溝S D 104及びS E 101付近にあたる。この範囲は布日瓦、及び当該期の土器等の出土が僅少であり、大溝の区画(S D 104、S D 01、S D 04、の範囲)の外であることから、当該期の東端であろうと考えられる。又遺構の状況から大溝S D 01、S D 104は南に連続しており、又調査区西端から内約40m付近で、堤防崩壊時に多量の布日瓦の出土がみられたと伝えられており、遺跡の範囲も南と西に求められる。

### ・方形周溝墓、土器棺について

弥生時代～古墳時代初頭の遺構を整理すると方形周溝墓、土器棺、土坑、溝状遺構が発見された。方形周溝墓はB C—10、11区に集中して3基発見され、その形状は1号がL字形と直線の組み合せで、2号3号は、直線の溝の組み合せから成り、各々のコーナー部は連続しない。溝の方向は1号、2号は南北が北北西を向き、3号は北よりやや東に向く。これらの方形周溝墓は、S D 117とS D 119の切り合いからS D 117の溝をもつ2号が後出であり、かつ、この2号は1号との方向も類似し、位置も平行移動を行ったような関係にあり、時期的には近いものと推定され3号が1号2号より古い時期とおもわれる。いづれも平面の形状から弥生中期～後期の特徴を示しているものといえる。

埋設土器としたなかに土器棺が認められた2号、3号、6号であり、いづれも壺が用いられ、3号と6号に副部穿孔が認められた。壺に用いられたとおもわれる上器片は、3号の口縁部の下から出し、壺の胴部破片であったが、本体そのものが、上半分を消失しているため明確に蓋であるとの判断もできない状況であった。時期としては弥生中期後葉の長床式に比定される。

都田川の下流域において低地への進出が表記資料等により弥生中期からとされていたが、今回の方形周溝墓、土器棺の発見により中期後葉という明確な時期が与えられ、又、上記のような墓域を形成する集落の存在をも推定させる。遠江地域において、壺の上器棺を出土する丘陵上の湖西市川尻遺跡、台状墓と土器棺が共存する横枕遺跡、等の例があり、立地は丘陵上が多く、土器棺は単独で出土する例が多い。これらの墓域の立地と比較し本遺跡は自然堤防上であり、また都田川下流域においては土器棺の発見は初例であり、今後の資料の増加と、検討にまつところであるが、一般的に、方形周溝墓、土器棺は集落に接する位置に営まれるといわれており、低地に生産と居住の場を求めて進出していった経過が

墓制にどのように反映されているかが大きな問題点であろう。今回発見された方形周溝墓と土器棺が、きわめて狭い範囲に集中することは、広大な後背湿地に対し、自然堤防上での生活範囲の狭さからくる自然的な規制をうけた結果とも推定されるが、遺跡の全体像が不明確な段階であり特に住居跡との位置関係が把握できないことから今後の類例の増加に伴う検討に期待したい。

#### ・中世面の遺構の性格について

中世面の遺構の特長は、大溝の存在でありこれに区画されたなかに主要な遺構、掘立柱建物跡、井戸が発見された。これらは計画的に配置された施設が想定される。伊勢神宮の御厨を記載している神源抄によると遠江国のなかに祝出御厨の名がみえ小字で祝田という地名が残されており、今回の調査地区もこの小字から祝出遺跡とした。この祝出御厨は伊勢神宮の内宮に属し五十余丁と記されている。この比定地は現在の祝田地区を考えるのが妥当であろうが、御厨に伴う施設は今までのところ明確ではなく今回発見された遺構はそれにあたる可能性が考えられる。尚遺物のなかで多量の布日瓦が大溝の区画内から出土しているところから寺域の可能性も指摘される。最後に大溝の方向について条里制の方向とほぼ一致することがあげられる。静岡県史3において旧中川村北部五日市場の金指町に接する地点に条里遺構の存在を指摘しており、その後、細江町役場所蔵の「中川村地引絵図」によって条理制遺構の復元が行われた。これによると都川川北部の中川地区はN-5°-Wを示し、南部の刑部地区はそれより北に1°<sup>註1</sup>偏るとしている。この方向の一致は大溝が条理制地割りを反映したものとみるとことができよう。しかし先の歌川の論文のなかで条里の方向は郡としての統一ではなく主として用水の便によって方向が決定されているという指摘は、一方で自然的条件の反映であり、用水を掘削する場合はほぼ同じ方向にならざるを得ないという点も考慮に入れなければならない。またこの地域において、年貢物資輸送に都川川、浜名湖の水運が大きな役割をもったといわれており、この点からも遺跡の立地、性格が問題とされよう。

註1. 歌川学「遠江国引佐郡における条里制の遺構」『愛知大学文学会・文学論叢第30編』1965

# 図 版





1. 祝田遺跡遠景東より（矢印の位置）

2. 調査前近景西より

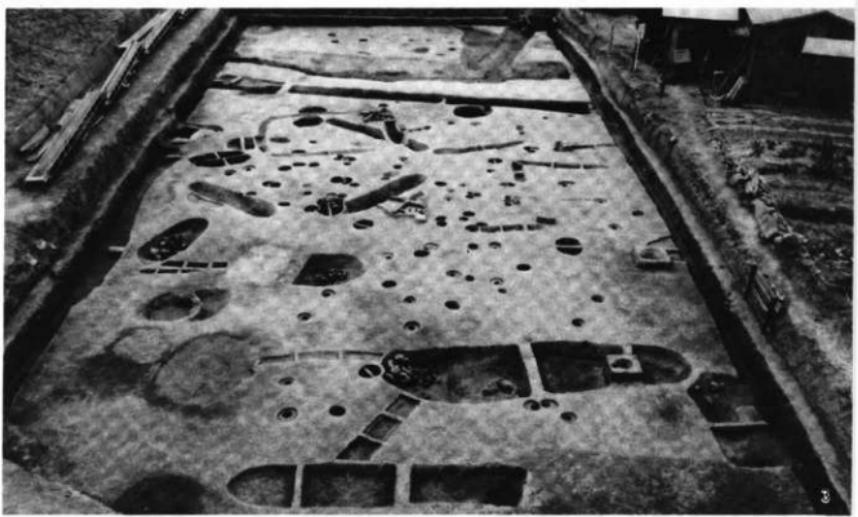


1. 57年度調査区全景（航空写真）

2. 58年度調査区全景（航空写真）



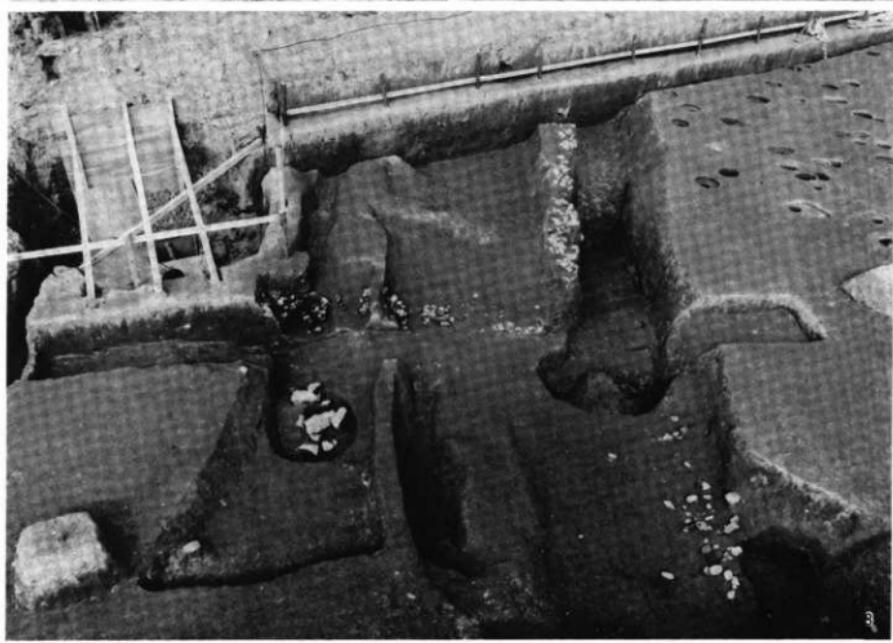
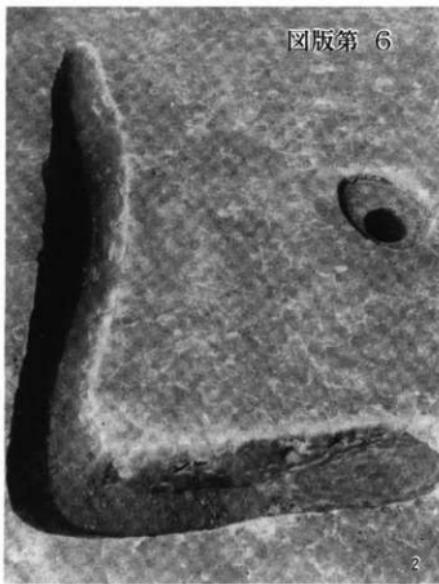
昭和45年宝塚市高区(日野町)全焼(西上)



1. 昭和57年度調査区中世面全景東より

2. 昭和57年度調査区弥生面全景西より

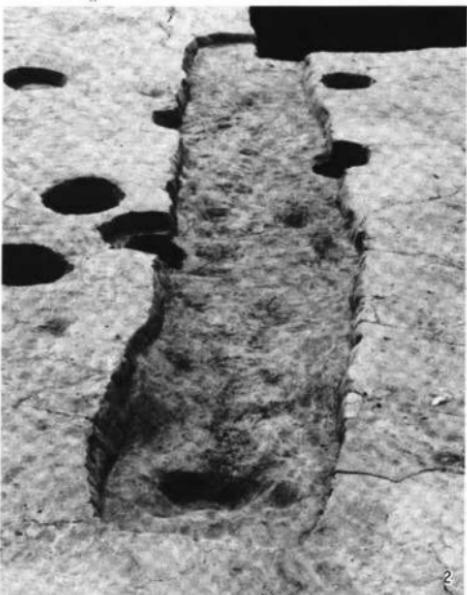
3. 昭和58年度調査区弥生面全景東より



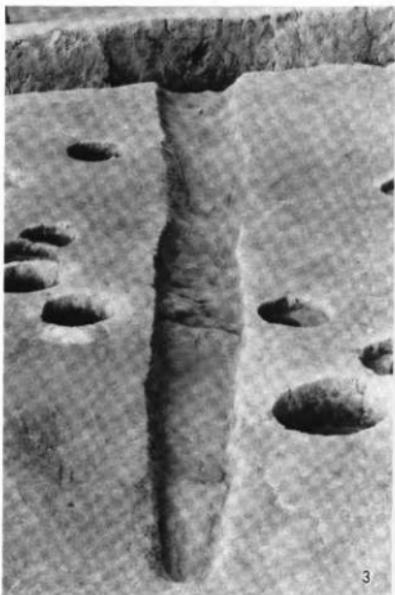
1. SD16 北より

2. SD123 南より

3. SD01 全 景



2

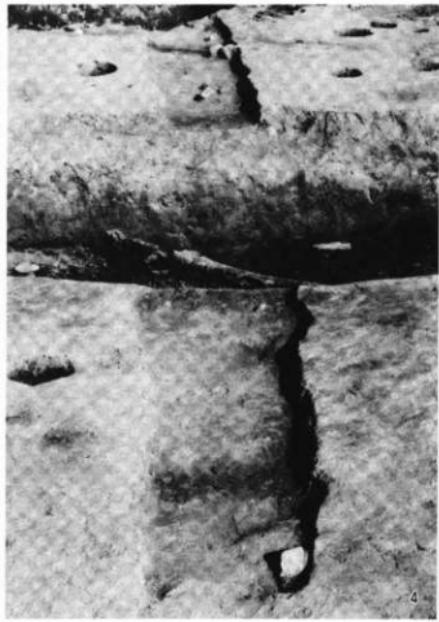
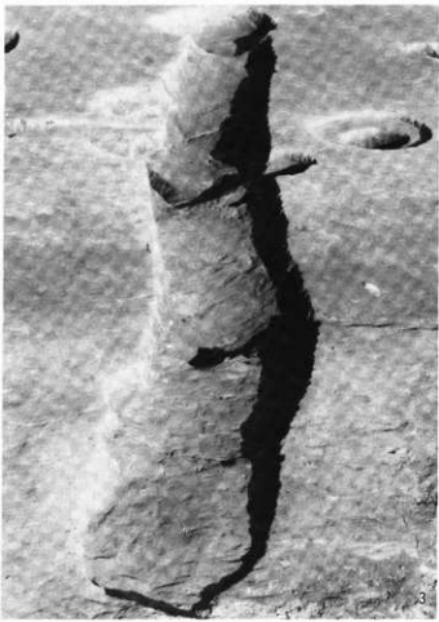
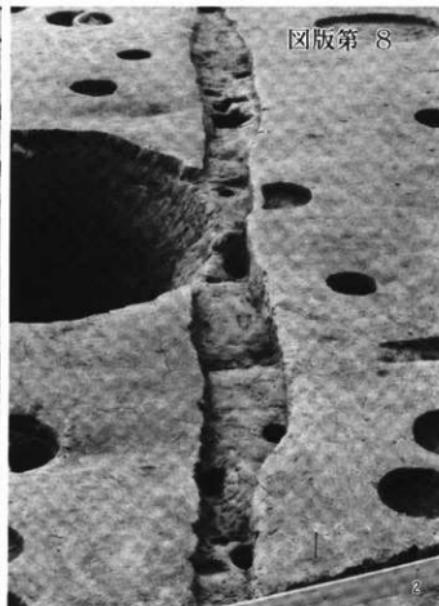
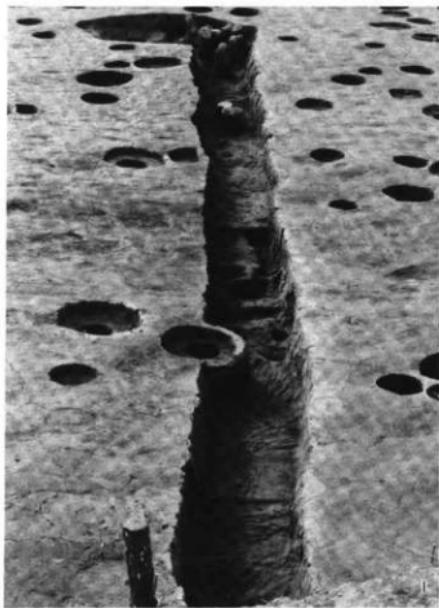


3

1. SD01 遺物、礫出土状況

2. SD02 北より

3. SD03 南より

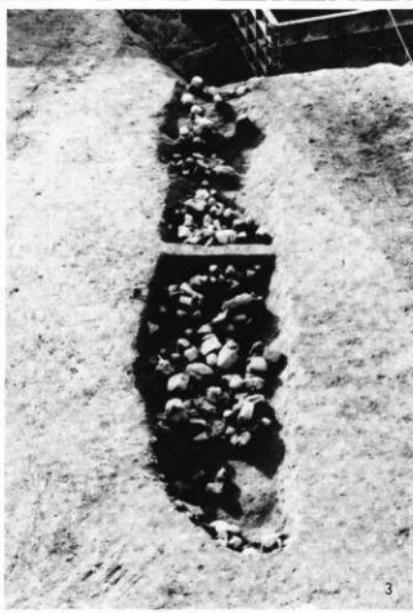
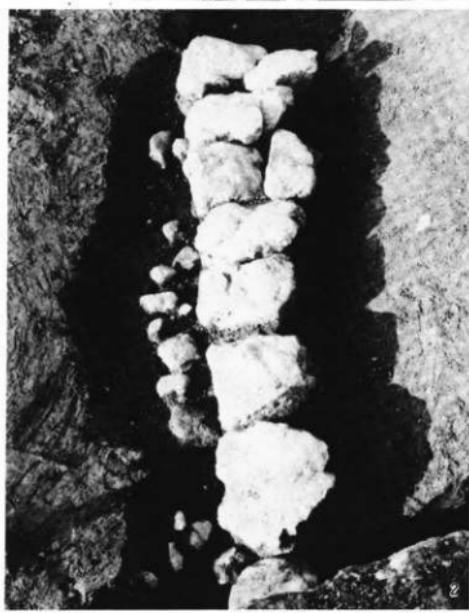


1. SD05 東より (57年度調査)

2. SD07 東より

3. SD09 西より

4. SD12 西より



1. SD103, 104 南より

2. SD103 石組み

3. SD101 東より



2

2

3

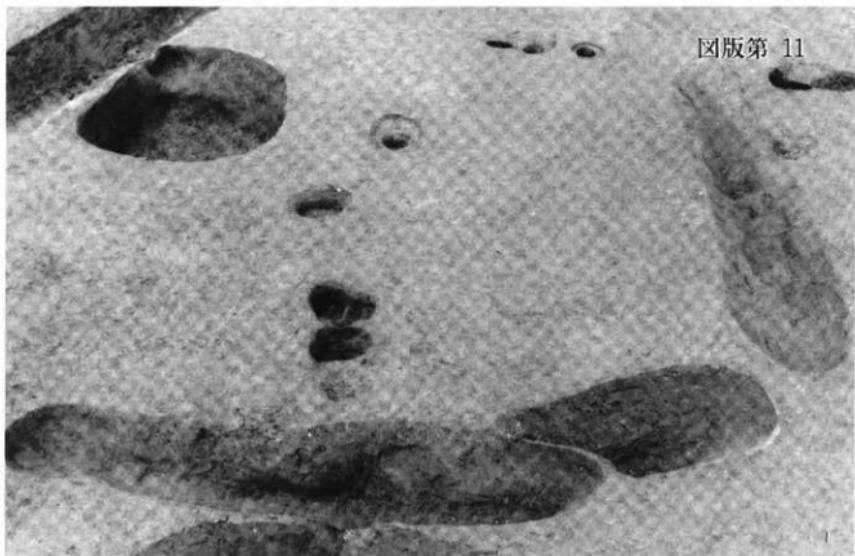
3

3

1. SD112 北より

2. SD105, 106, 109 南より

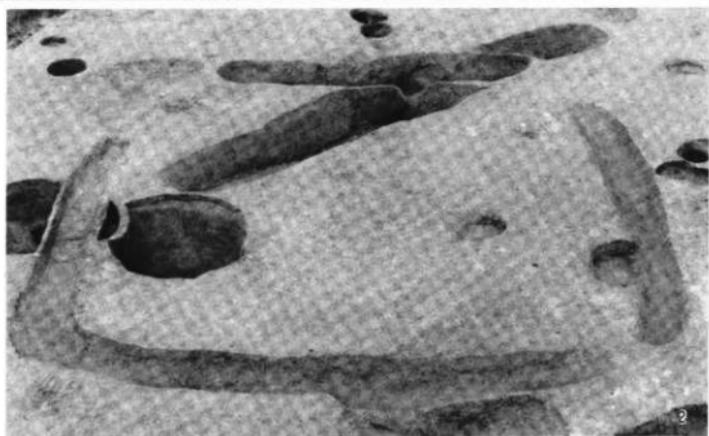
3. SD112, 113 北より



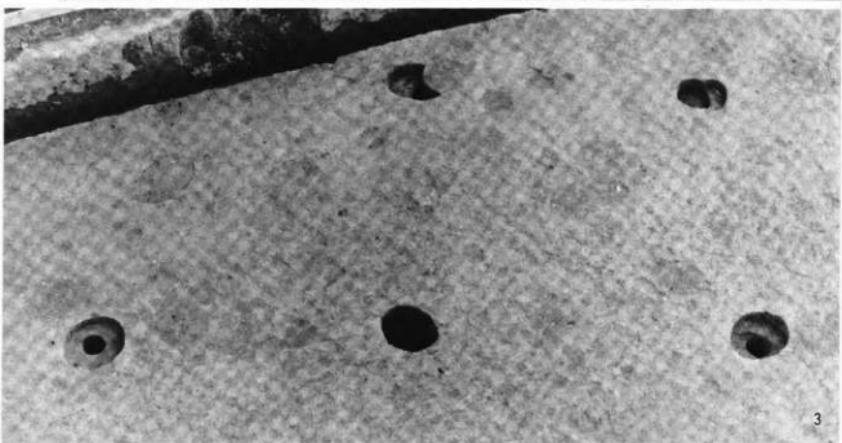
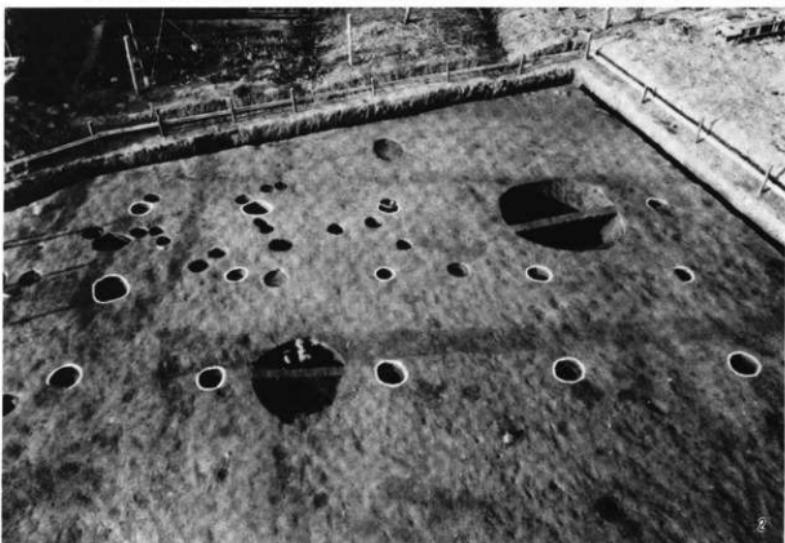
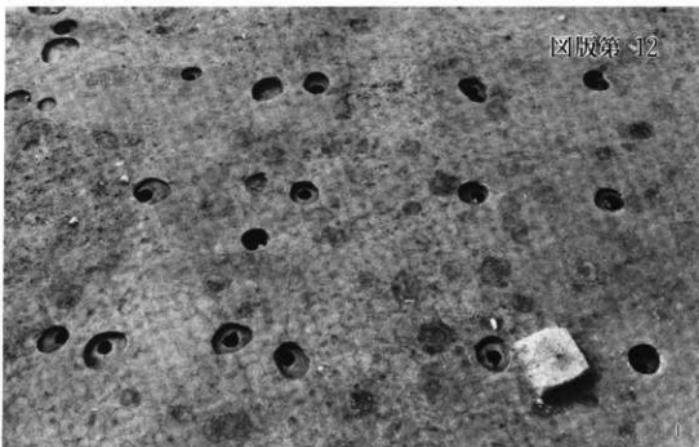
1. 第一号方形周溝墓  
南より

2. 第二号方形周溝墓  
南より

3. 第三号方形周溝墓  
東より



1. SH01 東より
2. SH02 南より
3. SH03 北より





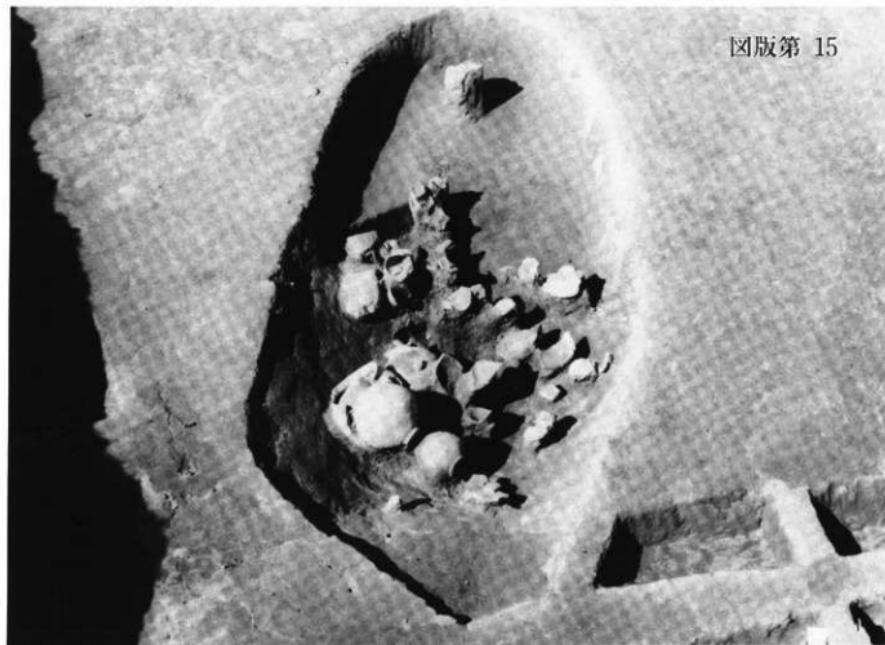
1. ピット内柱模出土状態  
2. ピット内襍板出土状態  
3. SX09 出土状態





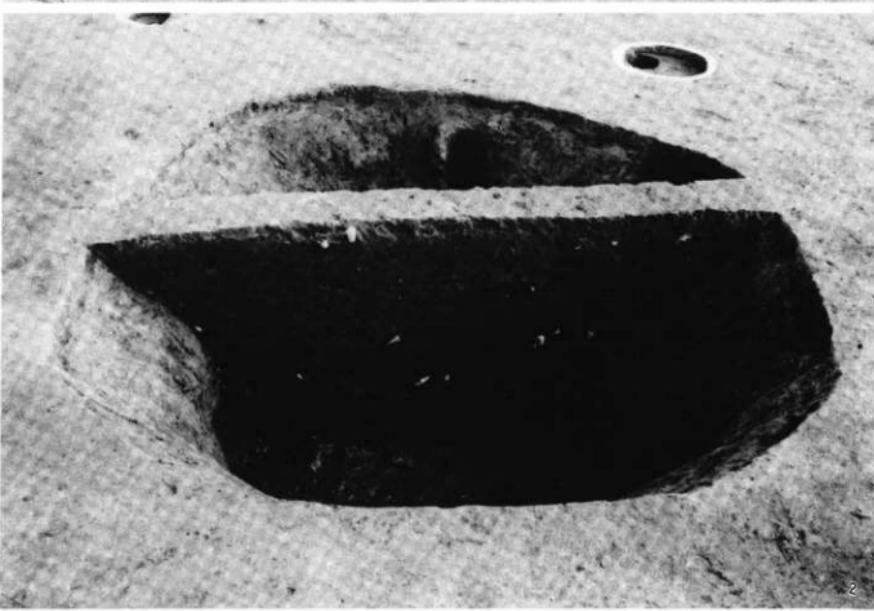
1. SXI12 土器出土状態

2. SXI21 土器出土状態



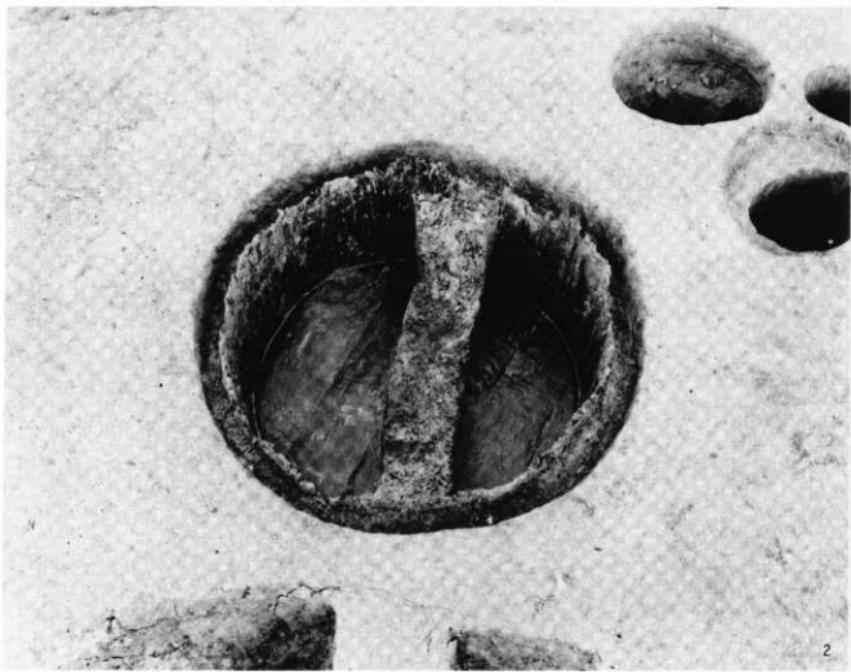
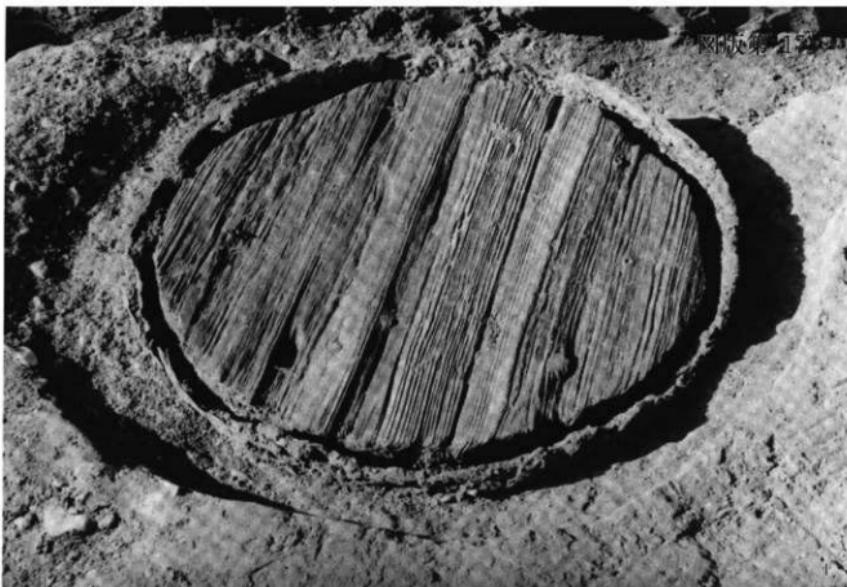
1. SX122 土器出土状態(1)

2. SX122 土器出土状態(2)



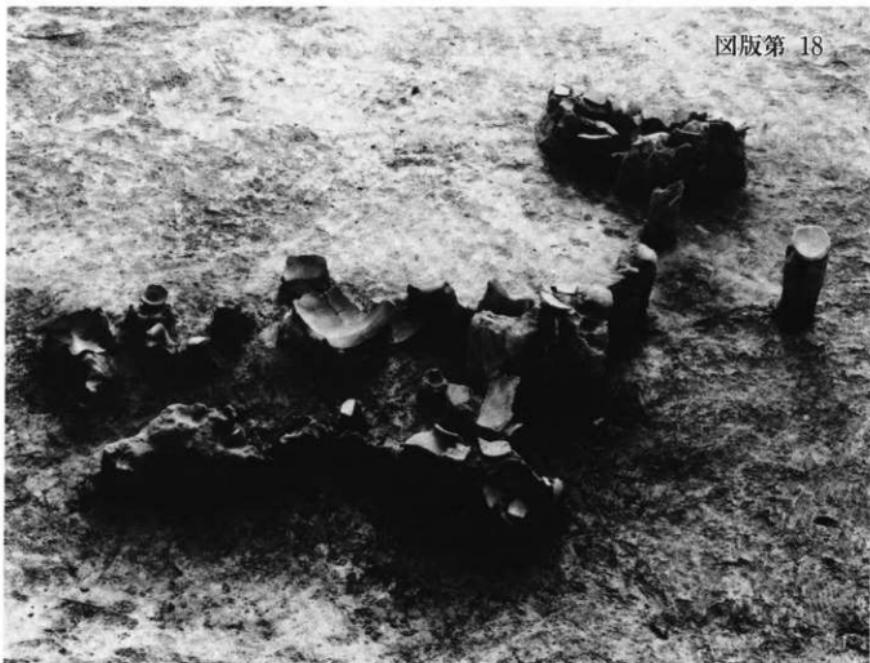
1. SX128 土器出土状態

2. SX06 南より



1. SX103

2. SX109



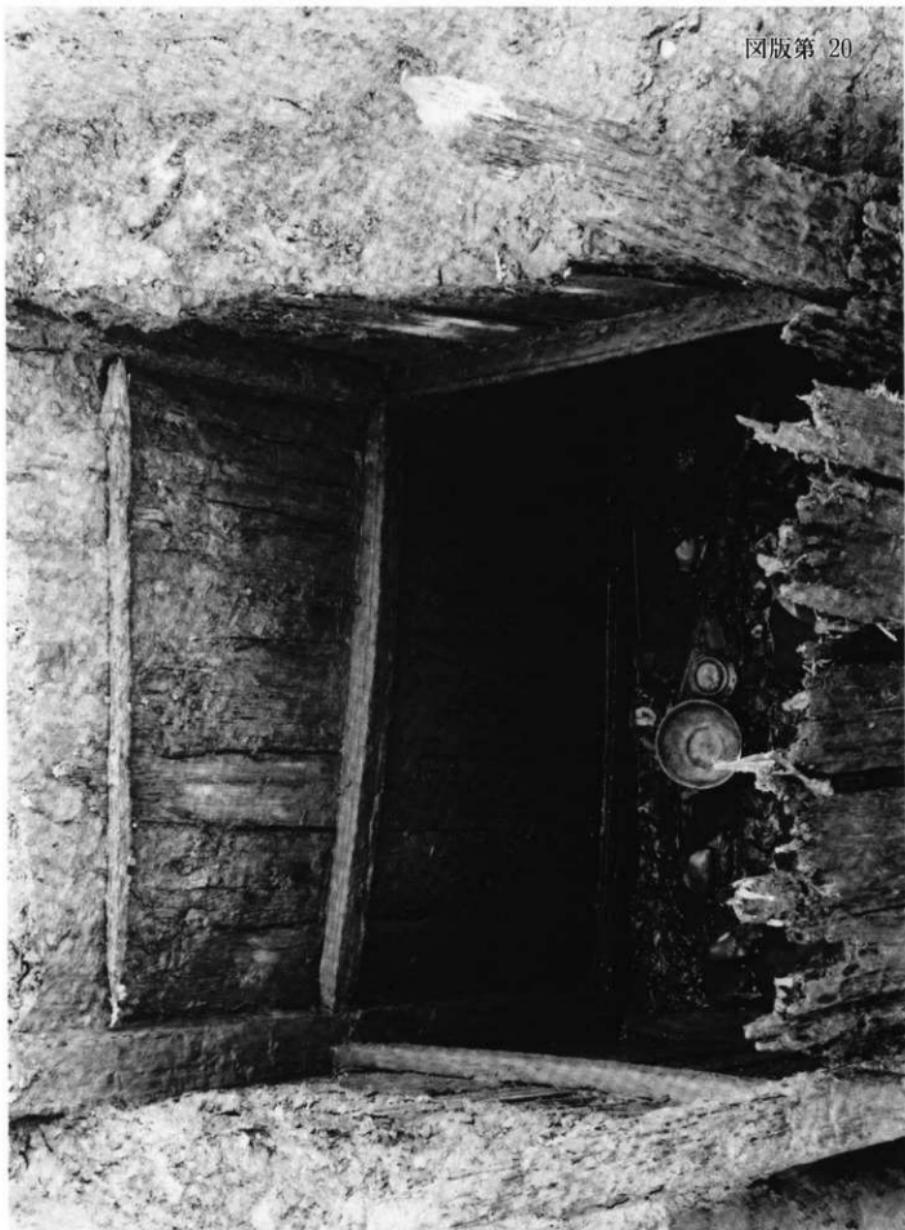
1. C8区土器集中箇所

2. B II区土器集中箇所



1. SE01

2. SE02





1. SE03 底の遺物出土状況

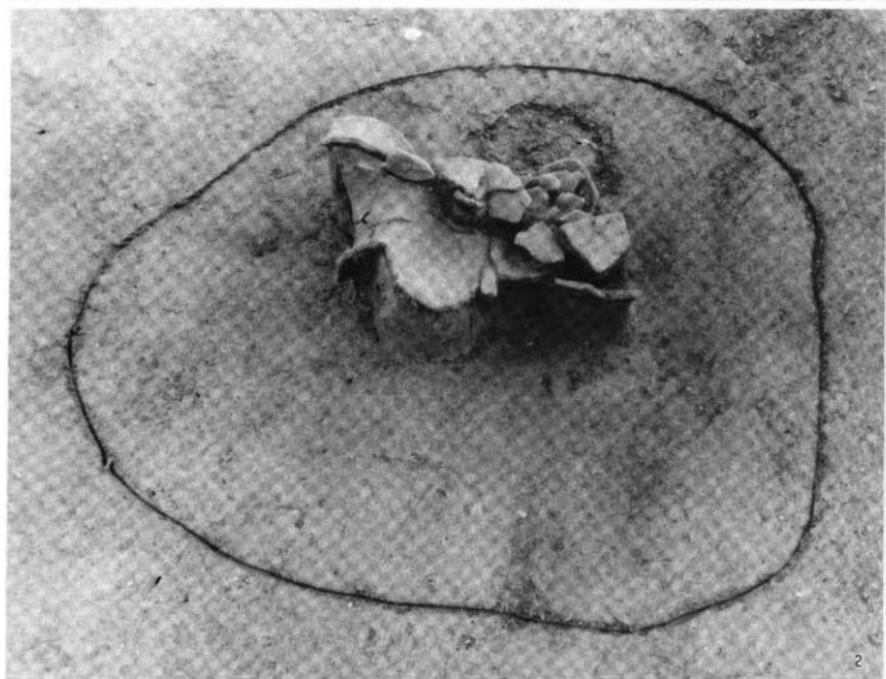
2. SE03 検出の状況



1. SE101 底の状況

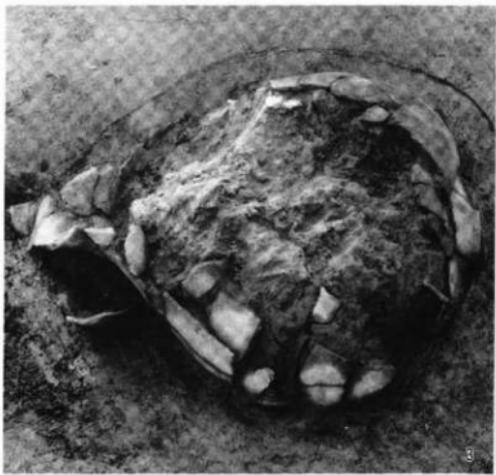
2. SE101 西壁





1. 埋設土器No. 1 出土状態

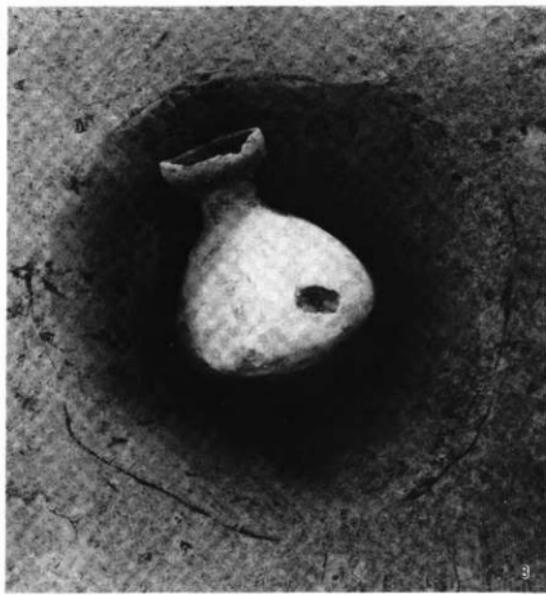
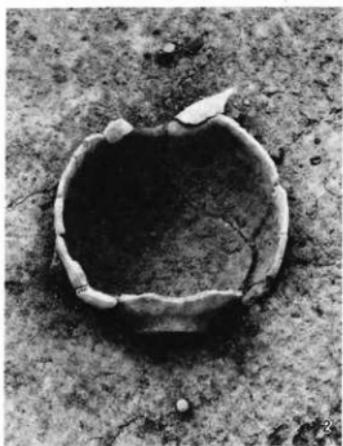
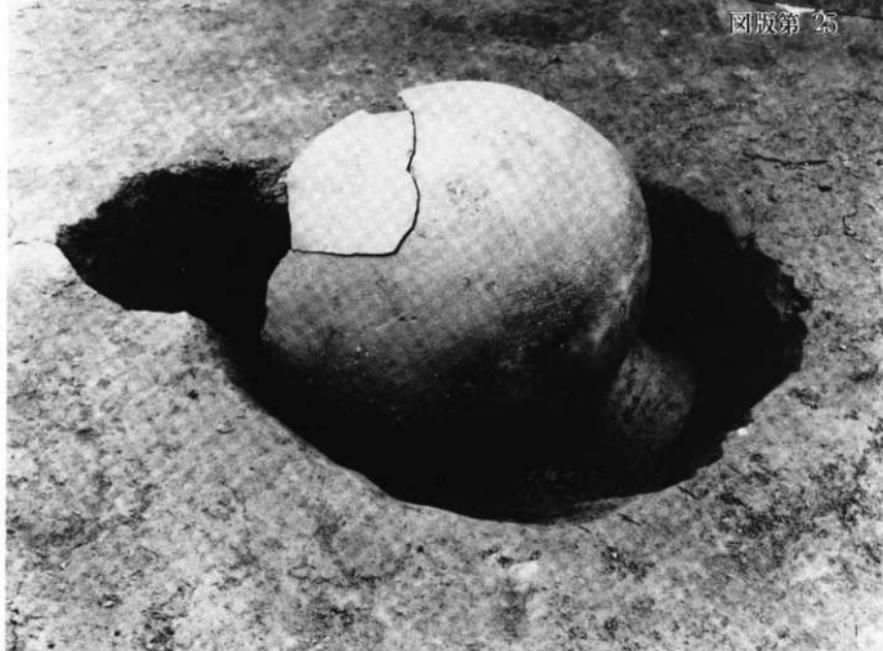
2. 埋設土器No. 2 出土状態



1. 埋設土器No.3 出土状態(1)

2. 埋設土器No.3 出土状態(2)

3. 埋設土器No.3 出土状態(3)



1. 埋設土器No.4 出土状態

2. 埋設土器No.5 出土状態

3. 埋設土器No.6 出土状態

## 祝田遺跡 I

昭和57・58年度都川河川改修工事（網江地区）埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和59年3月24日

編集発行　財團法人職府博物館付属  
静岡埋蔵文化財調査研究所

印刷所　株式会社　三　創  
静岡市駿河区3丁目5-30  
TEL (0542) 82-4031

増刷 60.11.